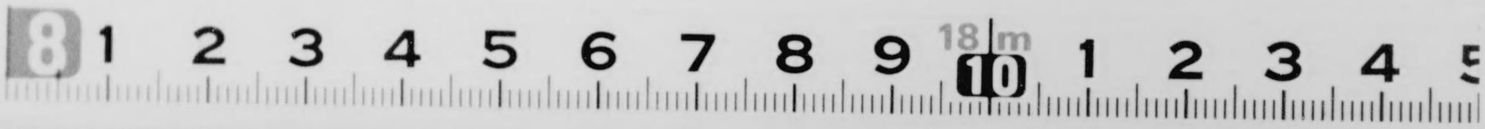
364
135



364-135

修養一日一訓

藤靖風齋編

大正
6. 4. 16
内交

恕

序

夫れ修養の人生に必要なることは、恰もプローペラの飛行機に於けるが如し、寸時も之れを忽諸に付し去らんか、忽ち覆没の悲運に陥るなるべし。されば吾人は一日も修養を怠るべからざるものにして、一日修養すれば一日を益し、三十日之を怠らざれば三十日を益し、一年三百六十五日修養を怠たらざれば一年を益す、斯くて之れを積んで十年、二十年に迫はゞ、以て渾融圓滿の人格を得べく、以て幽遠深微の智能を啓發し得べけん。凡そ新らしき時

代には新らしき人物を要し、新らしき人物は修養によりて得らるる予は茲に感ずる所あり、公務の餘閑この小冊子を編す、幸ひに青年諸君が修養資料の一端ともなるを得なば、單に著者の本懷のみにあらざるなり。

編者識

修養 一日一訓目次

目次

一月

1 善き人と惡き人……一
2 成功の早道……二
3 跛足が大成の基……三
4 自任自信力……四
5 忍耐の涵養……五
6 感情動物……六
7 心持が肝要……七
8 不能の二字……八
9 社交……九
10 最明寺殿教訓……一〇
11 苦は樂の種……一一
12 人世の目的……一二
13 驕慢……一三
14 親族と睦くせよ……一四
15 功勞と過失……一五
16 毀譽褒貶……一六
17 心の鏡……一七
18 舌は禍福の門……一八
19 理想と努力……一九
20 非常の功績……二〇
21 父母の眞愛……二一
22 交際の道……二二
23 眞實の清廉……二三
24 新井白蛾壁書……二四

目次

25 感化力……二五
6 器物と人品……二六
27 誠實……二七
28 女の嗜み道歌……二八
29 智者と愚者……二九
30 春日潛龍自警……三〇
31 抱き鯉……三一

二月

1 意と決斷……三二
2 境遇て心念を異にす……三三
處世と將棋……三四
4 人を使ふ道……三五
5 進取的精神……三六
6 簡略……三七
7 德を養ふ……三八
8 鬼の念佛……三九
9 誠の道……四〇
10 阿波の鳴戸……四一
11 大人と小人……四二
12 學びの道……四三
13 堅忍と剛毅……四四
14 人の節義……四五
15 小惡を恐るべし……四六
16 働くに限る……四七
17 快樂……四八
18 機會と決斷……四九
19 英雄の本色……五〇

目次

20 業は急げ……五一
21 剛强なる人……五二
22 旬ふ心のまこと……五三
23 幸福と災難……五四
24 人生の悟……五五
25 慈惠……五六
26 偉人の忍耐……五七
27 人は銀鏡の弟子……五八
28 金の使用法……五九

三月

1 身を樂しめば心を苦しむ……六〇
2 良心の指導……六一
3 人に溺れるな……六二
4 善は小なりとも行へ……六三
5 本多政信遺書……六四
6 言ふものは行はず……六五
7 己の材能を磨け……六六
8 眞善……六七
身體の强健……六八
10 欲を制せよ……六九
11 竟思と專斷……七〇
1 大器は晩成……七一
13 心の洗濯……七二
14 家の興廢……七三
15 蜘蛛の謀略……七四
16 男子の本領……七五
17 正しき觀察……七六

18 省身……七七
19 人の風聞……七八
20 習慣……七九
21 世間の褒貶……八〇
32 克己……八一
23 攝生の必要……八二
24 思ひやり……八三
25 身を立る道……八四
26 親しき友……八五
27 小事は大事の始め……八六
28 公共心……八七
29 膽力の養成……八八
30 婦人の本分……八九
31 小早川隆景壁書……九〇

四月

1 女子の德……九一
2 信用が大切……九二
3 恥の上塗……九三
4 輕卒……九四
5 子孫の戒め……九五
6 人の惡事は見ゆ……九六
7 道德的生活……九七
8 中根東里壁書……九八
9 信義を守れ……九九
10 大なる功業……一〇〇
11 一意專心……一〇二
12 相撲……一〇三

31 九つの修養……一〇四
14 人の一生……一〇四
15 大なる耻辱……一〇五
16 光陰を惜む……一〇六
17 道德の力……一〇七
18 博愛衆を濟ふ……一〇八
19 禮……一〇九
20 貧困と逆情……一一〇
21 眞の勇氣……一一一
22 信玄家訓……一一二
23 謝罪と改過……一一三
24 報恩の實……一一四
25 一字の戒……一一五
26 淸き言語動作……一一六
27 知るは易く行ふは難し……一一七
28 未熟は恥にあらず……一一八
29 人にはそひて見よ……一一九
30 夫婦の別……一二〇

五月

1 天賦の才能……一二一
2 嫉妬の心……一二三
3 怒は敵なり……一二三
4 友は選べ……一二四
5 自暴自棄……一二五
6 活潑と粗暴……一二六
7 大慈大悲……一二七
8 常識……一二八

9 學問と人生……一二九
10 人格……一三〇
11 鳥津家訓……一三一
12 心次第……一三三
13 發奮の捷……一三三
14 陰徳……一三四
15 公明正大の競爭……一三五
16 交際と恭敬……一三六
17 勤儉と獨立……一三七
18 知れば實行せよ……一三八
19 言語と人品……一四九
20 足代弘訓自警……一四〇
21 人の善行は稱讃せよ……一四一
22 無言の雄辯……一四二
23 七つの養生……一四三
24 親切……一四四
25 人の妻……一四五
26 萬事の基礎……一四六
27 閑居箴……一四七
28 修養の結晶……一四八
29 情夫痛戒……一四九
30 大言壯言……一五〇
31 無夜の反省……一五一

六月

1 自然的の制裁……一五二
2 宏量……一五三
3 本分を守れ……一五四

4 正直……一五五
5 習慣の養成……一五六
6 淡泊と武士道……一五七
7 信實の必要……一五八
8 私慾……一五九
9 時間の利用……一六〇
10 箴語……一六一
11 品性の修養……一六二
12 恭敬の心を持て……一六三
13 奮勵努力……一六四
14 公平……一六五
15 社會の秩序……一六六
16 生れ甲斐ある生活……一六七
17 價値ある人物……一六八
18 服膺訓……一六九
19 謙遜の人となれ……一七〇
20 機會の誤解……一七一
21 常識の養成……一七二
22 憎み……一七三
23 譽れを求むる勿れ……一七四
24 理と法……一七五
25 愛の人……一七六
26 身分限相應……一七七
27 遂行の義務……一七八
28 成敗の原因……一七九
29 完美の功……一八〇
30 首の用心……一八二

七月

目次

1 吾人の心掛……一八三
2 瑣細な事も忽にせず……一八五
3 芦間の小舟……一八四
4 兄弟の法……一八五
5 剛情と剛毅……一八六
6 無我……一八七
7 沈默は言語に勝れり……一八八
8 教育の秘訣……一八九
9 金剛石……一九〇
10 處世……一九一
11 勉强は愉快を感ず……一九二
12 恥なきは人にあらず……一九三
13 善き事は眞似よ……一九四
14 虛榮心……一九五
15 光陰は矢の如し……一九六
16 時機と成功……一九七
17 敏速を尙ぶ……一九八
18 職業と成功……一九九
19 讀書の秘訣……二〇〇
20 現在と自己……二〇一
21 金の逃げる聲……二〇二
22 婦人……二〇三
23 金錢の貸借……二〇四
24 國民と品性……二〇五
25 神と親……二〇六
26 理想と現實……二〇七

目次

27 爲し得る所を爲せ……二〇八
28 正眞と親切……二〇九
29 日用心法品目……二一〇
30 博愛……二一一
31 人生の旅行……二一二

八月

1 主義ある人……二一三
2 寛厚……二一四
3 唯だ信ぜよ……二一五
4 寵愛と獨立……二一六
5 艱難の轉用……二一七
6 禮讃なき者は失敗……二一八
7 信義を重んぜよ……二一九
8 自然に從へ……二二〇
9 勤儉と主婦……二二一
10 妄想妄念……二二二
11 機敏にせよ……二二三
12 讀書箴……二二四
13 雷同附加……二二五
14 楠正成壁書……二二六
15 人の精力……二二七
16 子女の教育……二二八
17 名利を思ふべからず……二二九
18 常盤の色……二三〇
19 生を愛すべし……二三一
20 情は人の爲めならず……二三二
21 規律を守れ……二三三

22 柳に雪折れなし……二四四
23 思ひ出ずるも耻かしや……二四五
24 忠君愛國……二四六
25 微を慎め……二四七
26 奢侈は亡國の基……二四八
27 怠惰は精神上一種の悲哀……二四九
28 菩提心……二五〇
29 有り難き大御心……二五一
30 氣節を尚ぶべし……二五二
32 服膺訓……二五三

九月

1 天爵と人爵……二五四
2 進取的氣象の養生……二五五
3 大丈夫の資格……二五六
4 志の主本……二五七
5 兄弟姉妹……二五八
6 商人の心得……二五九
7 司馬温正の育兒訓……二六〇
8 活らん哉……二六一
9 師恩を忘るゝな……二六二
10 道に迷ふな……二六三
11 學問に遲き時なし……二六四
12 謹慎……二六五
13 貞操は女德……二六六
14 孝は德の本……二六七
15 子弟の教誡……二六八
16 耻を知れ……二六九

17 勞働の習慣を養成せよ……二七〇
18 悔悟……二七一
19 命を知るの人……二七二
20 容儀は心術の寫映……二七三
21 朝夕手にする鍵は光る……二七四
22 敬の一字……二七五
23 婦人の力……二七六
24 心廣く體胖か……二七七
25 胎育……二七八
26 母自身の修養……二七九
27 憤怒を示すべき義務……二八〇
28 理想とする主義……二八一
29 善を取り惡を捨てよ……二八二
30 慎の一字……二八三

十月

1 はかる器……二八四
2 貧窮と精力の鍛練……二八五
3 律義者……二八六
4 先つ人間となれ……二八七
5 損して得……二八八
6 産業の土産……二八九
7 良藥は口に苦し……二九〇
8 義勇公に奉ず……二九一
9 讀書の樂み……二九二
10 第一等の孝行……二九三
11 親の愛……二九四
12 誹謗譏誣を戒む……二九五

18 幼な心……二八六
14 駟も舌に及ばず……二八七
15 辛棒が第一……二八八
16 憲の大慈大悲……二八九
17 依賴は見込が肝要……二九〇
18 自適……二九一
19 興味なき生活……二九二
20 借人の顏……二九三
21 自己の力を信ず……二九四
22 用心と思慮……二九五
23 眞面目の必要……二九六
24 百兩の黃金……二九七
25 天下に敵なし……二九八
26 人工美と自然美……二九九
27 心に誠なきもの……三〇〇
28 立田山……三〇一
29 眞摯の誤用……三〇二
30 一人の身帶にあらず……三〇三
31 十要路……三〇四

十一月

1 借と貸……三〇五
2 腹の立つ時……三〇六
3 人の一心……三〇七
4 臣民の本分……三〇八
5 實業家の嘆息……三〇九
6 女は容姿よりも心……三一〇
7 輕薄なる根性……三一一

8 煩悶の解決……三一二
9 父母の遺體……三一三
10 才能の發揮……三一四
11 行動にも潮時あり……三一五
12 人の名譽……三一六
13 先づ孝なれ……三一七
14 時に勢あり……三一八
15 究屈な學問……三一九
16 己に嚴にし他を寬にせよ……三二〇
17 心の放れ駒……三二一
18 二宮報德訓……三二二
19 書籍と人生……三二三
20 變人の怠惰者……三二四
21 無文字の活書……三二五
22 世界的智識を養へ……三二六
23 貴富と貧賤……三二七
24 義務……三二八
25 獨立自尊の精神……三二九
26 巢の中にある小鳥……三三〇
27 新友と舊友……三三一
23 自信力を養成せよ……三三二
29 夏の夜……三三三
30 尊敬……三三四

十二月

1 公明正大の爲行……三三五
2 中根東里壁書……三三六
3 全盛と老朽……三三七

目次

4 眞の信の驗……三三八
5 青年時代に老衰の覺悟……三三九
6 言行は　の衣……三四〇
7 有爲轉變……三四一
8 平生の心得……三四三
9 世の中の〳〵……三四三
10 戸田蓬軒壁書……三四四
11 偉人の雅量……三四五
1 質素……三四六
13 名は千載に過ぎず……三四七
14 大和魂と國民……三四八
15 一定の見……三四九
16 父母の責任……三五〇
17 非は理に勝たず……三五一
18 人君と臣子……三五二
19 心を勞する者は人を役す……三五三
20 一家繁榮……三五四
21 天と心……三五五
2 道　德……三五六
3 君臣の一心……三五七
24 意思の自由と責任……三五八
25 平和の七つ道具……三五九
6 本體卽ち工夫……三六〇
7 戀にも似たり……三六一
28 善惡の報ひ……三六二
29 人の品性……三六三
30 書物の話談……三六四
31 金と人……三六五

附錄

東西金言名句　一——二四

一月一日

善き人となるも、惡き人となるも、みな自分の心からである。人の善きことを見ては、自分はこれに傚はんことを心掛け、人の惡きことを聞いては、自分はこれに遠ざからんことを心掛け、日日夜々我れと我が良心に向ひて問ひつ問はれつして、努めて善き人に近づくやうにせねばならぬのである。

目鼻口手足は人の並なれど
心一つて廢たる身體ぞ

事大小となく、正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。人多くは事の差支ゆる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、跡は時宜次第工夫の出來るやうに思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先きに行けば成功の早きものなり。

（西郷南洲遺訓）

蓬業の濁りにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

尾藤二州が常に門人を戒めた言に、一事一業を成就せんと欲せば勉めて飲食男女の慾を抑へねばならぬ。予れとても木石にあらざれば、壯年の頃は迷ひの雲に、耳目を蔽はれんとせしこともあつたが、退いて我身を顧れば、幼少より跛足で、見る影もなき姿ゆゑ、これ等の慾念も忽ち失せ。精神一に學問に向つて、これが爲めに學業の大いに進める基いとなつたと。

一筋に心さだめよ濱千鳥
いづくの浦も波風ぞ立つ

他人の精力の豊富であつて、氣力の滿々たるものあるを見るとも毫もこれが爲めに他人を羨むには及ばない。自分がこれに肩を比ぶることの出來ぬを見て、決して自分の意氣を銷沈せしむることはない。斯かる場合には、自分の内心に潛伏する有力の克己、沈着の神髄を活用し、冷靜公平なる判斷力に訴へて、他人が斯かる精力を得るに至りたる原因を調べ、他人の應用し來りたる方法を考へ、飽くまで自任自信の力に訴へて、彼等と對等の精力と氣力を獲得するに努むべきである。

忍耐を涵養せよ、何事も忍耐せるものに必ずくるのである。時は決して錨を持ち去らず。又た好機も能く堅忍せるものに必ず來るのである。忍耐、温和、謙遜は精神の確實なる保護者である。而して勉勵と相俟つて、遂に稀世の財寶を積ましむるに至るのである。吾人に向つて、正當に吾人の所有すべき物を持ち來るのは忍耐であり、時は驚くべき大業を成功せしむるのである。而してその成功に達する經路は忍耐なのである。（マーシャル・ウエート）

おさへても堪忍袋なかりせば
何にか入れん癇癪のむし

人は常に心を虚にし、氣を平かにして、冷かに靜かに、事物の眞相を觀察することが必要である。心が冷かなれば、感情によつて事物を左右することもなく、氣が靜かなれば、事物の是非善惡利害得失を誤まることもない。人が往々その言ふ所、爲すに不公平とか、偏頗とかの謗を受けるのは、畢竟心の中に感情が働くからである。人は感情の動物である以上、感情の如何によつて、種々の觀察を下だすもので、それが爲め他人から誤解せられて、種々の非難攻擊を受けるのである。故に世の中に立つには、常に氣を靜め心を冷かにして事物の道理を明かにし、感情によつて事物を左右せぬだけの用意が肝腎なのである。

春の百花爛漫たる、夏の風涼颯々たる、秋の明月、冬の白雪、本來より悠閑として、誰れでも勝手氣儘に眺めて賞することが出來る、それを日夜アクセクと奔走して居るものは、一寸もこれを眺めることが出來ないので、何時の間に花が散つたか、知らぬ中に雪が融けたかと、丸で風花雪月が多忙であるやうにいつて居るがそれは自分が忙しくあるから、風花雪月が忙しく見ゆるのである天地萬物は本來廣大寛潤であるが、唯だ人が自分の心によつて如何やうにもなるのであるから、一心の持ちやうが肝要である。

凡そ人の一念の不善も、必ず天に通ずるの理あり。天は高きに居て、低きに聞くといへり。上、天を欺くべからず、畏るべし。人を欺けば終にその僞り顯はる。内に誠あれば必ず外にあらはるといへり。下、人を欺くべからず、恥づべし。天を欺き人を欺くはともに我が心を欺くによれり。我が心に不善を知りながらそれを行ふ、これ自ら欺くなり。我が心欺くべくからず。凡そ天と人と我が心と、みな欺くべからず。たゞ一筋に誠なるべし。こゝを以て君子の心は、常に青天白日の如くなり。小人の心は常に陰暗して測り難し。

（貝原益軒）

權勢の盛んな家や、私利を得られる處へは、決して足踏してはならぬ、若し誤つて一時の私慾に迷つて、一たび足踏をしたならば中途で惡るいことをしたと後悔しても、自分の名譽を汚がして、終身その汚れを拭ひ去ることは出來ぬのである。

濁すむ心の月を眺むれば
世の浮雲は日にもかゝらず

山深く何か庵を結ぶへき
心の中に身はかくれけり

親の教訓假初めにも背き給ふべからず、いかなる親なりとも我に惡しかれと思ふ事あるべからず、心を靜めて眼をふさぎ、よろしくこれを案ずべし。惡しき子を見て歎かん親の心はいかばかりなるべきぞや、たとひひが事をのたまふとも、これに從ひて違はざることこそ、孝子のふるまひと申すなれ、年だけ、よはひ傾き額には波をよせ、眉には霜をたれ、腰には梓の弓をはり、鏡のかげ自らすさまじく、心ひがみて言葉正しからねば、喜ぶべき事をうらみ、恨むべき事をよろこぶ、皆老いたる人の習ひなり、あはれと思ひて從ふべし。

（最明寺殿教訓）

苦は樂の種、樂しみは苦みの種と知るべし。主人と親は無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし。恩を忘るゝこと勿れ子程に親を思へ、子なきものは身にくらべ近き手本とすべし。捉におぢよ、火におぢよ、分別なきものにおぢよ、酒と色とは敵と知るべし、朝寢すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なることは驚くべからず、九分に足らば、十分にこぼるゝと知るべし。

（德川光圀）

精出してかせげば貧もおひつかず

樂な世界となるは眼の前

人世の目的は勤勞である。これを外にして目的はない。人がこの世に生れて來るのは、天から授けられたる勤勞を果さんが爲めであつて、決して安樂をしやうとするのが目的ではないのである。最うこれで十分だと云ふことはなく。幾ら勤めても勤めても、勤め盡して終うことはない。それを一つの事業を成し遂げたからと て安樂に暮らし行かうなどゝ思ふのは、大變な間違である。一身一家の繁榮を圖り、社會の進歩を期待せんには、自分の天職は永久不滅であると心肝に銘して、努力奮鬪を持續して行かねばならぬのである。

すべて人といふものは、自分の地位が高まると、自然と驕慢の心を生じて、勤務を粗末になし、人に禮儀を失つて名望を失墜するものであるから、驕慢の心を抑へなければならぬ。謙遜にして正直なるときは、その地位を失はずして永くこれを守ることが出來るのである。

慎みを人の心の根とすれば
言葉の花もまことにぞ咲く
うつし見よ向ふ心の水鏡
あをぐもなすも身よりなす影

親族を睦くすること大切なり、これも大抵、人の心得たること
なり。従兄弟と申すもの、兄弟へさしつぎて親しむべきことなり
然るに世の中、従兄弟となれば、甚だうときもの多し、能く考へ
見るべし。吾が従兄弟と申すは、父母の姪なり。祖父母より見れ
ば同じく孫なり。さすれば父母、祖父母の心になりて見れば、従
兄弟も決してうとくならぬなり。然しながら、従兄弟のうときと
申すは、元來父母祖父母の教へへの行届かぬなり、子を教ふるもの
心得ふべきなり。凡そ人の力と思ふものは、兄弟は過ぎたるはな
し、若し不幸にして兄弟なきものは、従兄弟に如くはなし。

功勞と過失との區別は、少しでも混同してはならぬ。功勞があつ
てもこれを賞せず、過失があつてもこれを罰せず、同等に取扱つ
てゆくと、折角骨身を惜まないで功勞を立てゝも、自分の名譽に
ならなければ得益にもならぬから、その後ちは職務を勤勉せずし
て、おのづから怠惰墮落の心を起すやうになるのである。それ故
に功勞と過失とは混同せずして、賞罰を明かにしてゆかねばなら
ぬのである。

我が身の行ひの善惡は、世人のほめそしりを、あながちに常にして、喜び懼るべからず。たゞ道理をもて法とすべし、わが行ひ道理にかなひなば、世こぞりて毀るとも懼るべからず。わが行ひ道理に背かば、世擧りて譽むとも喜ぶべからず。善き人に譽められ惡き人に毀らるゝこそ、君子といふべけれ。人ことに譽むるものは、却つて疑はし。多〻は巧みにして、飾される人なるべし。

（貝原益軒）

何事も唯たゞよく常のまゝにして
正直のみぞ人の道なる

己が分に安んぜざるは
己が身を惜めるは
己が言を飾ざるは
己が長を顯はすは
他の人を咎たきは
他の善を知らざるは
他の事を害ふは
他の短を擧ぐるは

心に誠なきが故なり。
心に義氣なきが故なり。
心に慮僞あるが故なり。
心に缺點あるが故なり。
心に岐路あるが故なり。
心に貪婪あるが故なり。
心に堪忍なきが故なり。
心に嫉妬あるが故なり。

わたくしを離れて見れば心ほど
あかるき鏡世になかりけり

世の中には遠慮會釋なく、何でも包み藏さず直言して、自ら好かつて居る人がある。斯やうなる人に出會ふたときには、油斷がならぬから、口を防いで談り合はぬがよい。左もないと、思ひがけなき禍害に遇ふことがある。謂ゆる心中の思慮は變改することを得べきも、一旦發したる言語は、再びこれを變改し得ぬからである。

ものいへば唇寒し秋の風
おもふこと默つて居るかひきがへる

理想なきものには煩悶なく、希望なきものには苦痛なし、自ら自己の短所を知らざるものに、發展の機あるなく、自覺なきものに發展なく、克己なきものに進歩なし、盤根錯節に際し、自己をしてその渦中に葬らしめず、超然としてこれを客觀視し、怒れる自己を笑ひ、泣ける自己を嘲けり、時として自己の腐甲斐なきを怒り、自己の輕薄なるに泣く、一切の修養は這裏にあり。自ら自己の客觀化する能はざるものは、世事葛藤裏に沒頭して、出離の道なきものなり、煩悶迷惑の内に狂奔して、覺醒の法なきものなり。

古へより今に至るまで、非常の功績を成すの人を見るに、その天賦の才能、或は中等に過ぎざれども、悉く心思氣力の強毅なる人にあらざるはなし。又た此の世界を動かし、最も勢力ありし人は英才の人にあらず。深信確證する所あつて、その事業に從事し器量宏遠、志向堅定して、又た阻遏すべからざるの人なり。

憂き事の尚ほ此上につもれかし
限りある身の力ためさん
踏まれても根づよく忍べ道芝の
やがて花咲く春は來ぬべし

父母その子を養つて教へざるは、これその子を愛せざるなり。教ふるとも嚴ならざるは、これその子を愛せざるなり。父母教ふるとも學ばざるは、これ子その身を愛せざるなり。學ぶとも勤めずこれも亦たその身を愛せざるなり。この故に子を養へば必ず教ふ教ふれば則ち必ず嚴なり。嚴なれば則ち必ず勤む。勤むれば則ち必ず成す。學べば則ち庶人の子も公卿と爲り、學ばざれば則ち公卿の子も庶人と爲る。

（柳屯田）

權貴の家と女おほき家とには、屢ば出入すべからず。あるじ留守の家ながゐすべからず。主人欠伸せば、早く立つべし。人來りて問ふことありても、志他にあらば、詳かに說くべからず。吾が好むことなりとも、人の好まざることをば語るべからず。朋友にも親切の異見、再三にして聞かずんば止むべし。我れなすべしと思ひ立ちたることは、明日あたりと思ふべからす。貧しき人は疎みやすく、富貴の人は親しみやすく、金銀にのぞみて爭ひ心起るものと知るべし。

（三浦梅園）

眞實の淸廉なる人は、決して淸廉潔白の名を立てぬのである。廉潔の名を立てる人は、まだ廉潔の名の必要があつて立てるのであるから、それが直ぐと貪欲である證憑なのである。そこで世の中に餘り盛名の嘖々たるものを探つて見れば、大變な相違のものが多いのであるから、世上の風評を餘り信じ過ぎて、輕卒に深く交はるときは、後ちに悔ゐるやうなことが多いのである。

一、言葉花咲くものは、こゝろ必ず實なし。
一、口に蜜を造るものは、こゝろ必ず針あり。
一、みだりに譽るものは、みだりにそしる。
一、妄りに悦ぶものは、みだりに哀しむ。
一、利欲にふけるものは、人倫の道をうしなふ。
一、色欲に迷ふものは、時に親戚にそむく。
一、書を讀んで邪智なるは、國の大義を害ふ。
一、氣に感じて始むるは、暫くにして消え散る。
一、心に感じて爲すことは、末を遂げて成就す。（新井白蛾）

一點の小さな火も、以て家を燒き、人を殺すに至るべく、一滴の醫藥は以て猛烈なる、惡疫を滅亡せしむる基となるのであるされば人の品位性行の他人に及ぼすべき、感化力に對しては往々輕々視するにも關はらず、その實は思ひがけぬ結果を齎らして、人生の成敗、禍福を決するに足るものあるを忘れてはならぬ。

上を見ぬ咲きぶりゆかし藤の花
花咲かぬ身をすぼめたる柳かな
たかぶりてちさばかり咲く櫻かな
白魚も洗へば水の潤りけり

人の心の中に物慾の念がなければ、恰かも秋の日の空のやうで、霽れ渡つた海のやうで、實に清々として何ともいひやうなく、よい氣のするものである。座上に琴や書物があれば、それで直ぐと仙人の住つて居る石室や、丹丘にあるやうな氣がする。人の心は念の持ちやうで、廣くもなり狹くもなる、琴や書物のやうな俗氣を離れたものがあれば、紅塵萬丈の市中の家でも、仙人の住家のやうに思はれる。それであるから人の居間に入つて、そこにある軸物や花瓶その外の器物を見れば、大抵その主人の人品が想像せられるものである。

（菜根譚）

この世の中を渡つて行くには、嘘や僞りや方便では、決して間に合ふものでなく、どうしても誠實でなければならぬ。實に誠實は成功の基礎をなすものであるから、誠實といふ觀念の乏しい人は自らその基礎を破壞すると同じやうなもので、生涯逆境に沈淪して居らなければならぬのである。

天地に受けしまことをそのまゝに
　咲きてはしぼむ朝顏の花
あだなりと見てやは止まぬ朝顏の
　咲くもしぼむも花の誠を

嫁はたゞ夫を主とあがむべし月日のごとくかげひなたなく。

立ぎゝはわけて女のたしなみぞさゝやくはなしわきへ立され。

口きゝてだて風流の女こそつひに夫のあき風ぞふく。

忌日にはわけて親をば思ひ出せいまごのすがたかたみとぞ知れ

あくびのび閨のうちにもつゝしめよ人の見るめにあいそつきぬる。

大小用よるはかならず紙燭もてくらがりあるきせぬものと知れ

眞實にわが子と思ひいたはらばまゝ母とおもふまゝ子あらじな

初めより嫁をいたはるしうとめはわが身もよく家もさかえん。

（女用文章初音錦）

愚かなるものは、智あるものから、何をも學ばないのであるが、智あるものは、愚かなるものから、學ぶところが少なくないものである。これは云ふまでもなく、觀察の有無によるもので、智あるものは常人の氣の附かぬところに、多くの智識を發見するものである。英國のブールネルが、テームス河の底に、トンネル工事を思ひついたのは、小さい船蟲が堅い艅材に穴を穿つところを見て、考へ出したのであるといふことである。

吾れ酒を飲まざれば業を廢せず、業を廢せざれば德こゝに進む。
吾れ酒を飲まざれば驕泰ならず、驕泰ならざれば德こゝに進む。
吾れ酒を飲まざれば淫心生ぜず、淫心生ぜざれば德こゝに進む。
噫々日月愈邁き、玩渇腐弛し、驕奢日々に長じ、慢淫日に生じ腐
草と同じく漸く盡滅せば、吾れ焉んぞ人と爲るを得んや。則ち吾
れ酒を甘んじて、而して業修まるを加へず。德進むを加へす。以
て人と爲るを得ず。夫れ酒の德を失ふこと此の如し。吾れ酒を飲
まざれば則ち德進み、業修まる。吾れ希くば以て人と爲るを得
ん哉、書して自ら警む

（春日潛菴）

淀川で鯉を取るには、漁夫が水中に入つて鯉とならび居て、脇へ
かひこみて浮み上るを抱き鯉といふとか、人を諫むる道も、初め
はその人の惡いことに共にならび居て、折よきところで善に赴か
することが肝要である。人に異見するにも、大方の人はその者の
非を擧げて異見するが故に、いよ〳〵容れざるに至るものである
先づその人の功をあげてこれを賞美し、斯かる功をなしながら、
如何でさる宜しからぬことをかなすや、その樣にすれば、必ずそ
の理に服するものである。

（雲萍雜誌）

すべてこの世の中に立つて、事物を處理するには思慮を要し、決斷を要することが多いのである。思慮は飽までも周密にして、毫も遺算のないことを期さなければならぬ、如何程多忙にある際とても、決して粗略にすべきではない、謂ゆる急いでは事を仕損ずるのである。然しながら、決斷はその時機に臨んでは、果敢にせねばならぬ、決して躊躇してはならぬのである。

明治天皇御製

ともすれはあらぬかたにふみまよひ
教へがたきは人の道なり

高い山に登れば、人の心がおのづから、曠大になり、水の流れに臨めば、人の意がおのづから深遠になり、雨や雪の降る夜に書物を讀めば、人の精神がおのづから清く澄むものである。斯やうに人はその境遇によつて、心念が異なるものであるから、折々黄塵萬丈の地を離れて、斯かる高大清淨の境に往つて、塵念を掃除し俗塵を洗濯することが必要である。

身をかくすまことの山は
心の奥をたづねてぞ見ん

世渡りはいかさま將棋のやうで、一歩でも無駄につかひ棄イれば身代くづれのはしとなる、よく〳〵考へて質素儉約に、内のかためをよくし、金銀をたくはへ、身をまもり、さて取引萬端損得を考へねばならぬ。おのれが内もかためず、ひたすら貪欲に人の金銀に念をかけ、とりためんとするは、下手の將棋で、いつも破れをとるものである。

世渡りは將棋と同じ角なれや
たゞ金銀のなくてつまらぬ

人を使にも無益につかはざるやう、常に我が召使ふ下女下男に至るまで、必ず無益につかはぬやうに、いたはり儉約すべし、我が財寶のみを大切にして、人をいとはず、慈悲もなく粗略にすると きは、我が妻子といへども和合せじ、況んや一季半季の召使ひ、わづかの給金取る者をや、諺にいふ『人を使ふは人につかはる』といふならずや。すべて人々を使ふに、十人使へば十人の心配、百人使へば百人だけの苦勞せねばならぬものとし思へば、又た使はる輕き身こそ安けれ、よく我が身にひき比べて、思ひやつて人を察すれば、和合しておのづから儉約も行はれて治まるべし、

（磯間良市）

すべて事業を經營するには、進取的の氣象を養成すべきことである。さうしてその氣象を維持するには、平素に剛毅屈せざるの力を以てすれば、その志望は堅確となつて、終には成功の曙光を認むることが出來るのである。蓋し心志の勢力なるものは、自己より生ずる力であつて、その勢力あるところが、即ち生命のあるところであつて、これが謂ゆる進取的精神の源泉に相違ないのである。何故かならば、自己より生ずる力でなくては、何事をも成就することが出來ぬのである。

朝顔はきのふにこりず咲く花ぞ
この力人にありたし冬の梅

簡略といへば何もかも、略する儀なりと心得るは誤なり。簡の字はエラブとよみたる字にて、一切の物毎に肝要なる儀の、致さで叶はざるを隨分致して、致しても致さでもよき事をば、略するを簡略とはいふなり。その肝要を選びて無用を略する意なり。この簡略の儀は、屈窮なる上には守るともなくて、おのづから行はるゝものなれば、さして勸めしむるに及ばず。唯だ富貴なる上に愼み守るべき道なり、簡略上に行はるゝ時、いつとなく下おのづから簡略行はるゝものなり。聖賢の道も簡略を先としたまふものなり。

（西川如九）

人の世に生れたては、禽獸、草木の死生榮枯するとは違ひて、四民とり〳〵に世を益するやうにあるべきことなり。まして士は耕作もせず、器械も造らず、力を勞することなければ、一入世に何事か益あるやうのことをなして、その功を遺すべき筈なり。されば才、斷、量、慮の四德を養ふべし。學問するは、斯樣の德を養ふ爲めなれど、わけて心を用ゐて養成するにつとむべし。

（眞木和泉）

心してなさばなるべし何事も
ならねは人の成さぬなりけり

誰れも知る、鹿は頭に角あれども心には角がない、獸物でも優しいものである。貪慾邪見のあるものは、角がなくして心に角がある。それで慾心の彼の岸に至んことを願ひ、精舍に參詣して、稱名を唱ふるのは、鬼の念佛ともいふべきである。

かたくなと笑はゞ笑へ眞直な
誠の道を行ける此の身を

二月九日

夫れ誠の道は學ばずして自ら知り、習はずして自ら覺え、書籍もなく、記錄もなく、師匠もなく、而して人々自得して忘れず、是ぞ誠の道の本體なる、渴きて飲み、飢えて食ひ、勞れて寢ね、覺めて起く皆此の類なり。（中略）、夫れ記錄もなく、書籍もなく、學ばず、習はずして、明かなる道にあらざれば、誠の道にあらざるなり。

（二宮尊德）

二月十日

世の中は渡りにくきものである。世間をあちらこちと渡りくらべて、幾萬の人につき合ひ、もまれ〳〵しなければ、憂きもつらきも辨へがたきもので、多年粉骨碎身、千辛萬苦の勞を積みて後ちに知ることが出來るのである。

世の中を渡り比べて今ぞしる
阿波の鳴戸に浪風もなし

大人と小人との別は、特に剛毅と剛毅ならざるとの別あるのみである。人一たび志を定めたならば、その後ち或は死すべく、或は成就すべし、決して中途で廢すべからず。この剛毅の志によつて、地球上何事にでも能くし得らるべきものである。たとひ才能ありとも、好き機會がありとも、剛毅の志なければ、兩脚の生物として、一箇の人とならしむることは出來ぬのである。

愛き事の尙ほ此上につもれかし
限りある身の力ためさん

學は當さに水を習ふが如くすべし。これを淺處に習ひ、而して後ち深きに向ふ、沒溺して死せんと欲する者數次、方さに始めて功を見る。若し其の溺るゝを懼れて、淺處を離れ得て了せざれば、終身水にありと雖も、亦た數尺の水を游泳すること能はず。

（莊田琳庵）

すべて事業は袖手して無爲であつては、毫しも成就するものではない。有りとあらゆる辛苦を重ね困難に出逢つて、これに打ち克ち、始めて成功するのである。されば成功の前には、人は努めて勞苦することを厭はぬ、習慣的の勢力がなくてはならぬのである徳川家康が最後の勝利を得て、十六代の久しき泰平の基を開いたといふのも。全く堅忍にして而かも剛毅であつたからである。

霜をへて匂はざりせば
上にはたゝじ白菊

人の重んずることは節義なり。節義は喩へていへば、人の體に骨あるが如く、骨なければ、首も正しく上に在ることを得ず、手も取ることを得ず、足も立つことを得ず、されば、人は才能あつても、學問ありても、節義なければ、世に立つことを得ず。節義あれば、不骨不調法にても、士たる丈のことには、事缺かぬものなり。

（眞木和泉）

曳かれなば惡しき道にも入りぬべし
心の駒に手綱ゆるすな

小惡をなしても天理を恐るべし、その一小惡身を亡すことあるまじと思ふは誤なり、勿論その一小惡は即日忽ちに身を亡ぼすことはなけれど、その心萬事に渉る故、小を積んで大となる、時至るときは則ち必ず身を亡す、筑波山の峰の雫落添ひてみなの川の名に立ち、吉野の峰の木々の雫落添ひて竹田の川淀には船をとゞむ例もあり。雲より落つる瀧波も岩に傳ひ上りて水上を見れば纔の谷川なり、谷川を上りて又その水上を尋ぬれば、爰の岩の根、彼處の苔の露集りて谷川となり、谷川自ら嶮崖より落ちて瀧となる。爰を以て一小惡とても恐れずしてなすときは、積むところ必ず身を亡すこと必然なるべし。

（澤庵和尚）

人はこの世に活動すべく生れて來るのであつて、寢て居て金が溜つたり、旨味ものを食べたりすることは出來るものではない。稼ぐに追ひつく貧乏なしで、どこまでも懸命に働くべきである。成功すると成功せぬとは、一にみな運であると、獨り極めに極めて仕舞うものもあるが、それは大間違。成程生涯のうちには、運不運といふものもあらうが、運は何日向いて來るものか、漠然たるもので、恰かも死を待つに等しいものである、それよりも懸命に働くに限るのである。

足ることを尻からげして樂をせず
稼ぐからだに福德はあり

人生の苦樂は生物にあるのではなくして、たゞ自分の心の中にある。それ故に自分の精神が衰へて居れば、たとひ綺羅錦繡に起き臥して居つても、なほ暖く安らかに思はぬのである。それと反對で、精神さへ酣であれば。粗末な處に起き臥して居つても、天地冲和の氣象を得て安樂なものである。それを山海の珍味を口にし綺羅錦繡を身にするにあらざれば、快樂をすることが出來ぬと思ふのは、大いに間違つて居るのである。

機會といふものは、偶然に起つて來るやうに見ゆるも、決してさういふものでない。すべて事の起るのは、起るの日に起るのでなくして、その來るや甚だ遠いと、古人の云はれた通り、因つて來るべき原因がなくてはならぬ。然しその原因は微細にして認むることがないのである。そこで終始一つの事業に意を注ぎ、その一擧一動に着眼して仔細に觀察して居るものであつたならば、終には能くその機會の由つて來るべき經路を窺ふことが出來るのである。又たとひその機會の來るを前知し得ても、直ぐそれを決行する勇氣がなかつたならば、折角の智慮も何の用をも爲さぬのである。

戰國時代の武將中で、最も早く英雄の本色を發揮したのは、北條早雲であるが。渠れは嘗て僧を召して、六韜三略の書を講ぜしめたが、開卷第一に『主將の法は務めて英雄の心を攬る』とあるを見て、遽かにその講義を止めて曰く、最早や聞くにも及ばぬ、予既にこれを實地に得たとて、その後を聽かうとはしなかつたといふが、渠れはその千辛萬苦の經驗と、その英發の天才とによつて夙に將たるの法を自得して居つたからである。

世にいてし甲斐こそなけれたぐひなき
人の人たる道をふまれば

人は少年に學び、壯年に早く立身すべきことなり。四民の所業も何も急ぐべし。たとひ成り得ても老ひぬれば末短し、日暮れて道を急ぐなるべし。北地陰寒の國には春の花遲し、陰寒にさゝゑられて然り。然らば秋の花は末の陰寒を考へて、疾く開くべけれども、節序あればこれも前年の寒氣、春に持越してその傷みにや、秋の花も遲く咲き出づる故に、又た來る秋末寒氣にあたりて盛りもなきなり。人の中年過ぎて立身して末の短きが如し。

（澤庵和尚）

『剛強なる人と瀑布とは、おのづから道路を作る』との諺のやうに、すべて何事をも自分の力によつて、開拓するといふ信念がなくてはならぬ。瀧といふものは前程に頓着なく、自ら進んでその通路を開いて居るので、人もその通りに自分が善と信じ、斯く爲さねばゝらぬと信ずる所へ向つては、どこまでも頓着なく邁進すべきことである、徒らに他人の力をのみ頼みとして、成功を得んと欲するのは、恰かも天の星をかつと同じことで、到底成功は望むことは出來るのでない。

己れ先づ咲いて見せけり梅の花

昭憲皇太后御歌

磨かずばまたも光りもいでざらむ
ひとの心もかくぞあるべき

過ぎたるは及ばざりけりかりそめの
言葉もあだに洩さゝらなむ

人こゝろかくこそあるべき白玉の
眞玉は火にもやかれざりけり

とり〳〵につくる簪のはなよりも
匂ふ心の誠をぞおもふ

幸福といふものは、自らこれを求めやうとしても、到底得られるものではない、それ故に不平の念を起さず、常にウキ〳〵したる喜神を養つて、幸福を招き致す根本とするまでのものである。然るに俗人はその根本とすべき喜神を養はずして、唯だ單に幸福を求めやうとするのは大間違なのである。災難もその通りで自ら避けたからとて、免かれるものではない。それ故に他を害する心を除き去て、成るべく災難に罹らぬ方法を講ずるまでのものである然るに俗人は他を害する心を除かずして、猥りに其難を避けやうとするのは大間違である。何人も須らくこの道理を味ふべきもの

人生を開悟して見れば、苦もなく樂もなく、貴もなく賤もない。唯だ己が天職を盡して一生を送るがよい。而して超然として宇宙と共に悠々たることの出來るのは、全く修養を積める功である。人は誰しも、この開悟の域に達せねばならぬ、それには心身の修養が第一である。

（修養講話）

よしあしを知り得ぬ人のほむるをも
嬉しと思ふことのはかなさ

貧者に財など施し與ふるは、惡業にはあらねど、さまでの善業にもあらず、貧者思ひがけぬ財を得れば、心おごりて放蕩の行ひをするものなり。忠孝の者、篤實の者に物を惠まば不志不孝、不篤實の者も羨みて見學ぶ、故に是れ積德なり。（高田與清）

德は本財は末にて陰德を
つとめば陽報ありとこそしれ
世の中に蒔かずに生えしためしなし
まきてぞ遂に運や開けん

カーライルが、多年苦心の末に出來上つた、佛國革命史の原稿は彼の友であるジョン、スチュアルト、ミルに貸し與へて居つたが、ミルの家の下女は、それが多年苦心の結果になつた原稿とは知らず、ストウブの燒附にして仕舞うた。後ちにカーライルがこのことを聞て、怒つて食事をもせぬ程であつたが、再び稿を起して記し終つたといふことである。

堪忍して見事なり醫の竹

艱難は人の師にして、人は艱難の弟子である、大人となり盛名を顯はすものは、大抵皆な艱難に師事し、これが弟子となれるのである。艱難は常に人を奬勵鼓舞し、それをして品行を造らしむる絶好の教則である。それ故に昏々として睡夢の裡に沈めるものも一たび艱難に出遇ふときは、憤然として警覺し、勢力を發作することが出來るのである、人は皆な艱難苦勞をすれば、思慮分別を生じ、思慮分別を生ずれば、おのづから善心が起るものである。

有名なる米國の富豪家カーネギーは、金の使用法を三種に分ちて左の通りに云つて居る。

一、子孫に遺すこと、却つて子孫を意氣地なしにする恐れあり

二、死後公共事業に寄附すること、死ぬまで見切りを附け得ざりし如く、又た裁判沙汰になることあり。

三、存命中に公共の爲めに寄附すること、これ金の用法の最もよき方法なり。

カーネギーは、存命の中に公共の爲めに寄附することを最上の方法と信じたるだけ、その實行に於て顯はれて居るのである。

名所舊蹟を見ることを好む人は、目を樂ましめて脚を苦しましむ
食を願ふ人は舌を樂ましめ心を苦ましむ。これを求むるに心を勞
せざれば食足らず、衣は輕きを求め、居は易きをもとむ、人は身
を樂ましめば心を苦しむ。心を苦めずして輕きを衣、易きに居る
こと難し、身を樂ましめたるものは耻に近く、心を樂ましめたる
ものは耻に遠し。

（澤庵禪師）

何事も限りある世と知りぬれば
賤が伏屋も樂しかりけり

修養といふことは、吾人の知識を開發し、我等の心術を正直にし
我が行爲を高尚にせんが爲めの方法をいふのでありまして、それ
には元來人間に識性即ち物を知り分る力といふものがあつて、天
然に開發せらるゝのでありますから、これを修養して博く且つ敏
活ならしめんことを期し、次には吾人の行ふ所は、善惡共に心よ
り出るのであるから、常に德性を涵養することを勉めて、誠意正
心ならしむることを期すべきであります。これは多く良心の指導
する所に從ひて、善良なる方向に進み得るものでありますから、
よく内外の誘惑を却けて、公正なる道を歩むやうにするのであり
ます。

（修養講話）

人に溺るゝよりも、水に溺るゝ方はよい。水に溺るゝことがあつても、游ぎさへすれば助かるべきも、若し人に溺れたならば、遂には救ふことの出來ぬに至るのである。何故ならば、人に溺るゝときは、その人を深く信じて、これを愛するが爲めに、正當の判斷を失ふからである。

何事も身のむくひぞと思はすば
人をも世をも恨みはてまじ

善も次第々々と積んで始めて名を成すものである。それ故に小さな善い事であつても、假初めに成し難きものである。惡も亦たその通りで、いさゝかの惡い事の積りで、身を滅ぼすに至るものであるから、小さな惡い事とて、決して油斷してはならぬ。漢の照烈は後主に敕して、惡は小なりとてこれを爲すことなかれ、善は小なりとも爲さゞることなかれといはれてある。何人も須らく心肝に銘して置くべき語であるまいか。

姪酒は早世の地形。
苦勞は榮華の礎。
珍膳珍味は貧の柱。
仁情は家を作るの疊。
華麗は借金の板敷。
堪忍は身を立つるの壁。
儉約は君に仕ふるの材木。
多言慮外は身を亡ぼすの根太。
法度は僕をつかふるの屋根。
我儘は朋友に惡まるゝの障子。

右十ケ條常に忘るべからざるものなり。

（本多政信）

口に言ふものは、必ずしも行ふことが出來ぬ。よく行ふものは、必ずしも言はぬものである。口舌に長ずるものは實行がこれに伴はぬ。實行するものは默してこれを行ひ、徒らに言語に現はすことはさぬものである。人は口に出して言ふことよりも、默してこれを實地に行ふことが肝腎なことである。

なせばなるなされはならぬ何事も
なさぬは人のなさぬなりけり

人は唯だ〳〵自分の不材無能を憂ひ、勉強奮勵してその材能を磨くのがよい。自分の材能が秀づれば、おのづから人に知られ、世にも用ゐらるゝものである。世の中には、どうかすると、自分の材能を省みずして、唯だ世を恨み人を咎むるものであるが、それは大間違ひのことである。それよりも唯だ自分の材能を磨き上ぐることに、熱中した方が直ぐてなくも、何日か世の中に知られて立身成功するに至るものである。

怠らず行かば千里の外も見む
牛のあゆみのよしおそくとも

人として人の知ると知らぬとに拘らず、常に獨りを慎むこいふことが尤も大切なことである。人の前でのみ眞實らしくするのは、謂ゆる僞善であつて、君子のこれと齡するをば恥づるのである。人たるものは常に眞善で行かなくてはならぬ。眞善は最も人の善德とするところである。

心だに誠の道にかなひなば
祈らずとても神や守らん

身體の虚弱なる人は、何事をなすに當ても、勇氣に缺乏して居る爲めに、自分の信ずる所を十分に貫ぬかうといふ、意志力を保つことが頗ぶる困難で、殊に神經質の人は、他人の毀譽を大層氣にかけて、自分に信ずる所を斷行することが、どうかすると出來惡い。それであるから、身體を强健にして、剛强なる意志あることが、自重心を增す基礎の一つである。人は十分の自重心を養ふことが最も必要であつて、それには是非とも身體を健全することを努めねばならぬのである。

愚者は不用の財を貪るに勞し、賢者は用の財をつくるに樂しむ。不用の財は限りなし、用の財は限りあり。限りある身を以て、限りなき財を求めば、死に至るまで貪欲盡くることなし。されば身を勞して財を集むるときは、その身終はれり。用の財は用の足ることを樂しむ故に壽を養ふ。財に不用といふことのあるべからずと思ふものあれども、日用の外に、散ずる財は、みな不用の財なり。

（柳澤淇園）

秋の田の苅穗の上の稻穗
求めある身はさはがしきかな

意思の餘りに強いものは、人の言ふことを容れずして、專斷するの弊があり、禮儀のない人は、人を輕じ侮る氣味がある。これはいづれも怨を取るの道である。それ故にこの二つ行ひあるものは多くの人を治めることの出來ぬものである。世の中に事業を爲さんとするものは勿論、すべて世を渡る上には、圓滿人を容るゝの度量がなくてはならぬのである。

吹き來る風にまかせてへだてなき
海の心のひろくもあるかな

天下に何事かを成さんとするに、急激にその目的を達せんとしたならば、却つて目的を達し得ぬことがある。又た目前の小利のみに目を附けては、大事は成功するものではない。それ故に大事を成さんとするものは、目前の小利を省みることをせず、務めてその成功を永遠に期すべき心掛がなくてはならぬ。謂ゆる大器は晩成に超したことはないのである。

子子や蚊になるまでの浮き沈み
骨折の今日こそ見ゆれはつ茄子

われ等は身體や衣服などの、垢を洗ひ去ると同じやうに、心の垢を洗ひ去らねばならぬ。安逸を希ふといふのは心の垢で、惡意を抱くのは心の穢れである。その他有らゆる禮にあらぬことを思ふのは、いづれも心の垢なのである。これ等の垢を洗ひ除かなければ、これが爲め遂には心が腐敗して仕舞うのである。身體や衣服などの不潔は、肉體の病氣の原因となるやうに、心の不潔はやがて心の病氣となるものである。人々心の病氣に罹らぬやう、常にわが身の行ひを反省して行かねばならぬのである。

すべて家の興ると廢るとは、義理にあつて富貴にあるのではないたとひ貴きこと公相となり、富むこと高き丘に等しといつても、人にして義理のないものは、その家は廢滅となる。若し簞食瓢飲肘見え纓絶ちても、人にして義理あるものは、その家の興起となる。わが身の爲めに謀り、子孫の爲めに謀り、親戚の爲めに謀るには、義理といふことが最も大切のことである。

色見えてうつらふものは世の中の
人の心の花にぞありける

三月十五日

大なる蜘蛛巻にかゝりたるを地に落せば、足を收め石の如く成りて、死を遁れんことを計る、彼れは小智にて人を計らんとす、少しなりとも走り遁るれば、その程も命存すべし。彼れが謀計は人よく知れり、彼れは思ふべし、人は知らじと、無智の人、有智の人を計ることも、蜘蛛の謀略に同じ。（澤庵禪師）

眞直に延びて曲るな今年竹
植ゑて習はむ竹のすなをを心にも

三月十六日

正義を行つて不正を斥け、善を好んで惡を憎み、勇敢にして怯懦ならず、活潑にして粗暴ならず、傲慢にして卑屈ならずして、恭謙遜讓の德を具へ、自由を愛すると同時に、規律を重んずるは、男子の本領なのである。何人をも男子の本領を持ちたきものではあるまいか。

かくばかりへがたく見ゆる世の中に
羨ましくもすめる月かな

人々の心にまかせおきて
たかれにすめる秋の夜の月

物を見るに色眼鏡を用ひるのは、見る間だけは面白くあるけれども、判斷を下だす時は、過ちを大にするばかりである。憎惡愛着の念を去つて、無私、不偏、公平、冷靜に觀察するのでなければ物の實質を窺ふことは出來ぬのである。

見る毎に皆そのまゝの姿かな

柳はみどり花はくれなゐ

省身とは身をかへりみるとよむなり、常に我がする事の善惡を考へ見ることなり。すべて人々が惡しきことには心附かずして、只だ一すぢに我はよし、人は惡し、我は道理なり、人は無理なりとばかりおもひて、我が惡しきこと、我が無理なることをさがしもとめず、我が身をいましむることなきは、有るまじきことなり。人のことをばさし置いて、我が身をかへりみて戒め愼むべし。此の如くすれば、禍おこらず。

（伊勢貞丈）

人の後言ゆめ〳〵宣ふべからず、たとひ善き事なりとも、事によりて無益なり。まして、かりそめにも惡き事を言ひ、沙汰してその人に聞かれ、長き世の恨を蒙り、この所得何事ぞや、亦その人遂にかゝり聞かずとし、當座につらなりたる中にも、心あらん人に必ず我が上をもかく言ひてんと思れんこと、大なる耻にあらずや。

（北條時賴）

裏表なくてすずしきうちはかな
わざはひはみな口からぞ行々子

習慣は心の光澤である。器物を磨くに幾回にして止めば、光澤を生ずるに至らぬものであるが、幾百千回となく、繰り返して行くならば、遂には美はしき光澤を生ずるものである。善き習慣もそれと同じことで、惡しき習慣は心の錆である。鐵のやうな堅硬なる心も、聊かたりとも、氣を緩ふすれば、忽ち挫くことは、恰かも光澤のある鐵器を、暫らくその儘にして置くと、忽ち錆を生ずるやうなものである。

善惡の人を見る目はありながら
我が身の上はうば玉のやみ

世間の人にみな褒めらるゝことは叶ひ難きこと也。むかし子貢といふ賢人、さと人にみな賞められ候はゞ如何と問はれけるに、孔子の曰く、里人の心の惡あるものには、賞められたるがよし、心の邪なるものには、憎れたるがよしと仰せ聞かされ候、尤もなる儀にて候、よき人に賞めらるゝはよき人の類也、邪なるものに賞めらるゝは、邪なる類也、心の曲りたる人に從ふは諂ひなり。錫といふ金は金白に似たり、眞鍮といふ金は黃金に似たり。然れどもと贋物なれば、早速人が見つけ申す、諂ひと申すものは本心では御座なく、贋物にて候間、嗜み申すべき也。（續翁問答）

人の偏癖は、習慣から生ずるものと、天性に出づるものとある、いづれもその根底は甚だ深いものであるが、習慣のものは、自身に發作るものであるから、自分がこれを改むるに困難なるの理なく、天性のものでも、その克ち難きところから、勉强忍耐久しきに亘つて、これに克ちたんことを努めたならば、遂には改めることが出來るのである。それ故に惡しき習慣は努めてこれを改めるやうにし、善き習慣をつけるやうにすることが、世の中を渡つて行く上に最も大切なことである。

毒物を食し病を引出すも口惜し、味に耽り病引出す人數多あり、愚痴の甚だしきにあらざれば狂なり。それ飲食は色身の粘衰をうるほし、養ひ世に長生へて己々道に進み、立身行道して素望を遂げんための藥なれば過不及なり、程よく飲食してこそ藥なれ、過ぐれば毒となりて遂に色身を害す。是等のことよく心得ある國手にて、飲食より病因を生じ、遂に夭死して不忠不孝の人となるあり、人々よく嗜むべきことなり。

（澤庵禪師）

己れの短所を省みずして、人の缺點のみを責むることが、普通の人情ではあるけれども、それは大に愼むべきことである。人々互に瑣細のことをも咎め立てするときは、紛爭の絶ゆる間がなく、社會の平和を保つことが出來ぬ。何人も常に心を寛くして、人の身の上を思遣り、人の過失はこれを看過すやうにせねばならぬのである。

うつるとは月も思はずうつすとは
水も思はぬ廣澤の池

およそ身を立てるの道は、忠孝勤儉の四字に在り。君に仕へて心をつくすを忠とし、能く親に仕ふるを孝とし、學問家業に怠らざるを勤といふ。約にして奢らざるを儉といふ。忠孝はその分なり勤儉は家をおこすの法なり。又た身を保つの道は、智恵の内に含み、人にへりくだり、言少なく身を顧みて過をあらため、己れを責めて人をそしらざるにあり、上を誚しざらざるはいふに及ばず是れみな殃を遁れ身を保つの道なり。（貝原益軒）

よく咲きて人に見られよ宿の梅

人と交はるには、我が心の底を打ち明けて言はんと欲する所を言ひ、人と我れとの間に些細かの隔てなければ、互に氣持よく本心を傾けて語り合ふことが出來る、斯やうにして始めて、人と親しき交りを結ぶことを得るものである。青年血氣のものは、日頃親しき朋友との間でも、時として感情の衝突が起つて、爭論の端を開くことがないとも云へぬ、斯かる場合には、徒らに意氣地を張らず、己れの思ひ違であつたことに心附けば、淡泊にその過誤を謝すべきである。

小事の費をなさんとも思はざる人は、大事を成し難し。小を積みて大をなすものなれば、小を捨て大を成すことなるべからず。大の本を忘れなば末廣くなるべからず。草木も一寸に出づるをおしたてゝこそ、大にもなるべきものなれ。君子は本をつとむ。本立ちて道成ると云ふこと、孔子の語なり。萬に本あるべし。本を忘れぬ心よきなり。一粒の米、一錢の錢を惜しと思ふ人は、大なることをなすものなり。

（澤庵禪師）

誰れしも自己を愛し、我が家を愛せぬものはなく、我が物や我が家の物を愛せぬものはないであらう。この心を移して他に及ぼし我れを愛する心をもて人を愛し、人々の集團を愛し、我が物や我が家の物を愛すると同じやうに、他人の物や共有の物を愛するを、公共心といふのである。人々我が物を愛し、我が家の物を愛する心を移して、常に他人の物を愛し、共有の物を愛する公共心を保つことが大切である。この心が常に存するものは、決して公園を散歩して花の枝を折つたり、柵を破つたりなどの亂暴を働かぬものである。

剛膽なる所を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲す所の跡を觀察し、且つ事業を翫味し、必ず身を以てその事を處し、安心の地を得べし。然らざれば只だ英雄の資のみあつて、爲す所を知らざれば、眞の英雄といふべからず。是故に英雄の其の事に處する時、如何なる膽力ありと試較し、其の及ばざるもの、其の足らざる所を研究勵精すべし。思ひ設けざる事に當つて一點動搖せず、安然として其の事を斷ずる所に於て、平日養ふ所の膽力を長ずべし。

（西郷南洲）

夫婦は榮譽も恥辱も同しうすべきものである。單獨に榮華に耽けるべきものではない。夫の行ひが禮に適ひて、品行が正しければ常に柔順にして夫の言ふ所に從ふがよい。若しも夫の行ひが正しからぬときは、唯だ恐れ懼れて、我が不行屆を省みて恐るべきこ

とである。

霧や花と和合の世のかゞみ
名月はめしひの妻の泣く夜かな

一、おもしろの春雨や、花のちらぬほど。
一、おもしろの儒學や、武備のすたらぬほど。
一、おもしろの武道や、文學をわすれぬほど。
一、おもしろの酒宴や、本心を失なはぬほど。
一、おもしろの遊藝や、辱めをとらぬほど。
一、おもしろの好色や、身をほろぼさぬほど。
一、おもしろの利慾や、理義の道ふさがらぬほど。
一、おもしろの權力や、他をほこらぬほど。
一、おもしろの釋敎や、世理忘れぬほど。（小早川隆景）

何事をも謙りて人に讓り、恭しく敬んで人の事を先きにし、己れの事を後にして、善き事ありとも、みづから名乘りて誇るやうなことなく、若し身に過失ありとも、强ちにこれを辯解せず、如何なる耻をも堪へ忍び、常に恐を懷ひて我が身を落とし、ヨワ〳〵しく人に謙るやうにする、これが女子の德とする所なのである。

みるのほどうつむいて居る稻穗かな
そだつほど下へ手はつく柳かな
さき折るな人の言葉の花ざかり

信用といふことは、最も何人にも大切なことで、この信用を得る根本は、實に正直にあるである。人正直なれば、世の信用はおのづから集つて、事業も亦た從つて發展するのである。これと反對に、若し不正直であつたらば、たとひ一時榮えることがあつても忽ちにして信用を失ひ、復つ起つことの出來ぬに至るものである事業をなす人は勿論であるが、すべてこの世の中を渡つて行くのには、信用がなくては、孤立するの外はない。人として得たきものは信用である。

聞くは當座の恥、聞かぬは末代の恥といへば、知らぬことは人に尋ねて、よく〳〵心に掛くべきことなり。譬へば少しの恥ありしと塗り隱さんと思ふより、泥鏝の先にて取繕ふとも、いよ〳〵恥の上塗となり、はじめに倍して見苦しかるべし。讀書と義理と世間の附合は、出來ぬは恥の第一ぞかし。

愧といふ字をしらずば世の中に
恥ぞと思ふ恥はあるまじ（さとし草）

日常何事を爲すにも、先づよく考へて然る後ちに行ふやうにせねばならぬ。考へずして行ふは、謂ゆる輕卒といふものである。輕卒に事を行ふときは、他人に無禮を加ふるの心がなくして、無禮をなすことがある。自他を害するの心がなくして、害を生ずることがあるのである。世の中に過失と稱へるものは、大抵思慮の足らぬところから起るのである。

君子の行ひは靜以て身を修め、儉以て德を養ふ。淡泊にあらざれば、以て志を明かにすることなし、寧靜にあらざれば、以て遠きに致すことなし。夫れ學は靜を須ち、才は學を須つ。學にあらざれば、以て才を廣うすることなし、靜にあらざれば、以て學を成すことなし、諂慢なるときは、則ち精を研くこと能はず、險躁なるときは、則ち性を修むること能はず、軍は時と馳せ、意は歲と去つて、遂に枯落を成さば、窮廬に悲歎すれども、將た復た何ぞ及ばんや。

（諸葛孔明）

人の惡るきことは能く〳〵見ゆるなり、我が身の惡るきことは覺えざるものなり。我が身に知られて惡るきことあらず、能く〳〵惡るければこそ、身に知られ候と思ひて、心中を改むべし。たゞ人のいふことをば、能く信用すべし、我が惡るきことは、おぼえざるものなるよし被仰候。

（蓮如上人）

心とて人に見すべき色ぞなき
たゞ行と言の葉に見ゆ

善にして美且つ眞なる生活は、樂しき生活といはれるし、幸ひなる生活と稱へられ、又た平和なる生活といはるゝのである、惡にして醜且つ僞なる生活は、苦しき生活でなければならぬ、禍ひなる生活でなくてはならぬのである。恐るべき生活ではあらぬか人々いづれも淸らかなる、樂しき生活をして世の中を渡りたきものである。

一、父母をいとをしみ、兄弟にむつまじきは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。

一、辭はゆるくして誠ならむことを願ひ、行は敏くして厚からむことを欲す。

一、怒りに難を思へば悔ひにいたらず、欲に義を思へば耻をとらず。

一、病は口より入るもの多し、禍は口より出づるもの少からず。

一、忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

（中根東里）

よく信義を守るものは、人の尊敬を受けて、おのづから人の上に立つに至るのである。それ故に信は尤も重きものである。何事も忠實にして信義を失はなければ、成就することを得るも、驕慢怠惰に流るゝときは、忽ち失敗するものである。一身一家の盛衰より、一國天下の興廢に至るまで、みなこの理に外ならぬのである

白雲の八重にかさなるをちにても
思はむ人に心へだつな

大なる功業は何等の障害なく、スラ〳〵と成就するものではない大なる功業の成就は、必ず幾多の艱難苦心を經たる結晶である。然しその幾多の艱難苦心は、外面にあらはれたところよりも、必ず外面にあらはれぬところに、多く存することである。水戸光圀卿が

たゞ見れば何の苦もなき水鳥の
脚に暇なき我が思ひかな

との歌は、この間の消息を傳へたものではあるまいか。

二疋の兎を逐ふものは、一疋の兎をも獲ることは出來ぬ。二心を懷くものは、いかでかよく一事をも成し得ることが出來やうか、されば何事をなすにも、一意專心これに從はなくてはならぬ。例へば書物を讀むときには、その意は書物の上に專らなるべく、語學を習ふときには、その心は文字の外にあつてはならぬのである

エチソンが電氣に關して、種々の發明したるのも、全く專心一意の賜物である。

相撲をとる人の勝たん〳〵と思ふが故に、我れよりか劣りたる人をば、もし存分骨身の破るゝ程、力に任せて勝ちて喜ぶと雖も、亦た我れに勝れる人には負けて、身骨を破れて苦むなり。世間の人の心も人を毀けん、人惡かれと思ふ人は、必ず我が身あしし、我れより弱き人をば抑へ滅すれども、又た我れに勝る人ありて、我れを抑ふること歴然たり、只だ人も善かれ、我れも善れと思ふべきなり。

（澤庵禪師）

公益　世のために勉めよ人はかゞしより
勤勉　せいだせばこほる間もなし水車
油斷　ゆだんしてあらしに逢ふなはな芒
反省　かへりみよ身を幾度も日ながどき
忍耐　ひとも世にかくや寒苦をしのぐ梅
愼重　見とゞけぬうちはかたるなはつ櫻
知足　上見ればかぎりなしとや百合の花
協力　松をさくちからはみえじ六つの花
謙遜　さがりてはなほ名やあぐる藤の花

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくが如し、いそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望みおこらば、困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝事ばかり知つて、まくる事をしらざれば、害その身にいたる、おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるよりもまされり。

（徳川家康）

浮薄にして外面を衒ひ軽卒にして事を破り、恐るまじきことにも怖れ、怒るまじきことにも怒り、卑劣の人もて人を猜み、心に誠なくして虚偽不正直を敢てし、親切の心なくして人情に背き、心にもなき世辭をいひて、ひたすら人の心を迎へんとし、己れの力を量らずして、徒らに不平を鳴らし、自重の念に乏しくして誘惑に陥り、己に克つ力弱くして利慾を恣にし、勤勞を厭ひて安逸を貪り、勤儉の心掛けなくして、窮乏を招くが如きことあらば、これぞ恥辱の大なるものといはねばならぬ。

人、少壯の時に方つて、惜陰を知らず、知ると雖も太だ惜むに至らず、四十以後を過ぎて、始めて惜陰を知る、既に知るの時、精力漸く耗す、故に人の學を爲す、須らく時に及んで立志勉勵すべし、然らざれば百悔するも、亦た意に益なし。

（佐藤一齋）

明日ありと思ふ心のあだざくら
夜半にあらしのふかぬものかは
夜の中は一日ほかになかりけり
きのふとはすぎつ明日は知れず

人生にありと有ゆるものは、一つとして道德の力を藉らずして、その眞價を發揮し得るものはない。道德の力は實に人事界に於ける、すべての物の原動力なのである。若し道德が衰頽して、人の心がひたすらに名利に向ひ、また廉耻の何物たることを解せぬに至りなば、この世の中は人の棲息するに堪へぬところとなるであらう。文化の進歩、社會の發展は、道德の力に依るのでなければ期待することは出來ぬのである。

仁を履みて慈を行ひ、博愛衆を濟はゞ、十一の譽あり。即ち幸福常に身に從ひ、臥して安く覺めて安く、惡夢を見ず、天護り、人を愛し、毒せず、兵せず、水に喪はず、火に喪はず、所在に得死して梵天に昇る。

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば
父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ
なほふべき袖こそなかれ世の中に
寒けき民の冬の夜なく

人として人のためによかれと思ふこと、誠に難いかな。凡そ生きとし生ける者、爭はずと云ふことなし。空をかける翅、地をわしる獸、螻蟻蚊虻に至るまで、爭はずと云ふことなし。然れども人にして爭ざること難し、心底には爭ふと雖も、外爭はざる顏するは禮なり、これを人といふ。この禮を存せずして人に向ふときは、即ち早くともに爭ふ、これ人にして禽獸なるに近し。

（澤庵禪師）

貧困は誰れしも欲するところでなけれども、古來身を貧困から起して、大業を成し遂げたるものは頗る多いのである。豐臣秀吉の如き、二宮尊德の如き、リンコルンの如き、フランクリンの如きは、いづれもそれである。富貴の家に生れながら、遊惰安逸に貴重なる歳月を費せるが爲め、遂には祖先傳來の家產を破つて、悲慘の最後を遂げたるものは少なくない。貧困は決して恐るべきものではないが、眞に恐るべきものは遊惰なのである。

しるや人たもつ心の玉だにて
みがくにつけてひかりありとは

眞の勇氣あるものは、ことさらに、勇氣を外に現はさんとはせぬものであるが、勇氣なきものは、ことさらに勇氣のあるやうに見せかけて、己れの卑怯を飾らうとするのである。何事に拘らず、ことさらに外見をつくろはんとするものは、內に缺けたるところを蔽はんとするものである。內に骨のない蟹が、いかにその外貌を嚴めしく粧へるかを見ても、首肯かれるのである。何人も眞の勇氣は持つべきものである。

泣く中に寒菊ひとりこらへけり

一、心に物なき時は體泰かなり。
一、心に我慢ある時は愛敬を失ふ。
一、心に慾なき時は義理を行ふ。
一、心に私なき時は疑ふことなし。
一、心に怒りなき時は言葉和らかなり。
一、心に勇ある時は悔ゆることなし。
一、心に堪忍ある時は事を調ふ。
一、心に貪りなき時は人に諂はず。
一、心に迷なき時は人を咎めず。

（武田信玄）

英雄豪傑といはれたる人は、みな能く過ちを改めたのである。何人でも過ちのないものはない。たとひ過つことがあつても、能くこれを改めさへすれば、過ちなきに近かいのである。過ちを改むることは、眞に男子らしき行ひである。藺相如に罪を謝せし廉頗の如き。又たペインに罪を謝せしワシントンの如きは、眞に能く過ちを改めたるものといはねばならぬ。男子らしく過ちを改むることは、剛毅の人でなければ出來ぬことである。

我がよきに人のあしきはなきものよ
人の惡しきは我があしきなり

師の教に從ひて文を學び、藝を研きて我が智識を啓き身に才能を修むれば、則ち禽獸たるを免かれ、世に立ち家を治め、人並の生活を爲すことを得るに至る、是れ實に大恩に非らずや、かゝる大恩を受けし上は、いかでこれに報ゆる志なかるべき、苟も報恩の實を擧ぐること能はずんば、人にして人に非らざるなり。若し其の師にして困厄に陷り給ふが如きことあらば、力の及ばん限りこれを救ふべし

（日新館童子訓）

我れ人にかけしめぐみは忘れても
ひとの恩をばながく忘るな

飲食もなるべき丈は薄くすべし、房室もなるべき丈は少くすべし是れ身を全ふするの法なり、衣服もなるべき丈は質素にすべし、器用もなるべき丈は儉朴なるべし、宮室もなるべき丈は卑陋なるべし、是れ家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると、放縱の欲を抑へ制すると、天下國家を治る人も、一身を守る者も、抑の一字、至近切要の學なり。

（太田錦城）

儒やあまりにめてて こぼれうめ
待ち惜しむ程や心の花ざかり

すべて人たるものは、身體や衣服、居室の清潔を保つと同時に、言語動作の清からんことをも期さねばならぬ。穢なき言語や卑しき動作は、人々の惡しき感情を惹き起し、交際上の禮に背き、己れの人柄を墮し、世人の侮を招くものであるから、何人も常に言語動作を慎みて、苟にも己れの品位人格を墮し、世の人達より侮を受けることのなきやうにせねばならぬのである。

あかつきの寢覺になりと思ひ見よ
日々に三たびはかへり見ずとも

知ることは易く、行ふことは難し、然れども悉しく知らざれば行ふべからず、たとへば農業の如き、時をたがへず、蒔き草刈り土かへばよく實ることは誰れも知れど、唯その事を知りてせざれば益なし。又其知るにも時を考へ、培のかひやう、鋤きやう、鍬のつかひやう、夫々に付けてその仔細あること、勤めざれば知り難し、善をすればよく、惡をすればあしとは、知れたる事ながら、よきにも仔細あることなり、勉めて學ばざれば其理わかち難し、

（中略）善事のよきは知り易くして、善事をするは難きなり。

（三浦梅園）

年齢が若ければ體力も弱く、經驗に乏しく、知識も少なく、德行も全からぬのである。これは當然のことであつて恥ではない。體力が弱ければこそ、身體を鍛へて强くせんとするのである。經驗に乏しく知識が少なくあるからこそ、經驗を積み學業を勵んで、知能を啓發せんとするのである。德行が全からぬこそ、師長に就いて訓戒を受けて德器を成就せんとするのである。足らぬところなく、缺けたるところがなければ、修養の必要はないのである。今日未熟なればこそ、他日完成すべき見込はあるのである。それ故未熟を恥ぢずして、進んで完成せんことを努むべきである。

かりそめに交りては、よきやうなる人も、隔なく睦びかはしてはおもひの外にあしきなり、にくきおもやうにて、言ひ出づることはこは〳〵しく、なつかしげなき人の、その事彼のこと聞えあはするに、なさけ深くたのもしきもあり。されど、よく心をとゞめて、よしあしを見しりて、打ち解けもし、へだてもすべきことなりかし。

明治天皇御製

あやまちをいさめかはして親しむは
眞の友のこゝろなるらむ

（藤井高尚）

夫婦の道は別を主とす、人に男女あれば夫婦あり。されど男女の間に別といふ敎へなき時は、必ず亂るゝこと禽獸に異ならず。故に夫婦の間にも別ありて敬を失はず、内外の分を嚴にすべきことなり。

（曾澤安）

明治天皇御製

たゞしくも生ひしげらせよ敎ぐさ
男女のみちをわかちて

人はそれ〳〵生れつきの才能を異にするものなれば、萬人が萬人ともに同一の發達といふことは、望みがたけれども、或る程度までは、各自の努力によつて、達することが出來るのである。然しなから若しも怠惰にして勉强をせず、たとひ勉强しても、その方法をば誤つて得るところが少なく、忍び耐へる力なく、みづから修むることを知らず、その爲めに何事をも成すことなく、唯だ碌〻として空しく、生涯を終はるやうなことあらば、それこそ大に恥づべきことである。

人の妻たるものは、嫉妬の心努々起すべからず、夫もし不義過ちあらば、わが色を和らげ、聲を柔かにして諫むべし。諫め聽かずして怒らば、まづ暫く止めて、後に夫の心和らぎたるとき、復た諫むべし、必ず氣色を暴くし、聲をいらゝげて夫に逆ひ叛くことなかれ。

（女大學）

家内中なかのよいのが寶船
心やすく　世を渡るなり

人に侮辱せられたり、嘲笑せられたり、罵詈せらるゝときは、何人も不快の念を起して、腹立たしく思ふを禁じ得ぬのである。されど我れに之れに應ずるに、怒りを以てしたならば、彼れも亦た更に我れに報ゆべく、又た應じ又た報いて、已むことがなかつたならば、その害は測ることの出來ぬものになるであらう。怒りは敵である。この敵に勝つものは勇者である。人は時として怒らずには居られぬ、唯だ一旦の怒りは、一時の感情として、早く忘れて仕舞うことを努むべきである。怒りを宿むときは怨恨となり、復讐となり、幾多の忌まはしき所業を生ずるに至るものである。

友を選ぶに、正直にして曲げて人に從はざるものと交はれば、己が過を聞く、人を愛し實義ありて、たのもしき行あるものと交はれば、己れ誠にすゝむ、廣く事を辨へたるものを友とすれば、智をひらくなり、是れみな益友なり、友として交はるべし。容顏を飾り、それと其の事の見えざるやう、闇に人々の氣風に合せ、媚說をなすもの、或は面前にては從ひ、退きて其の言を毀る者、辯舌巧に是非を紛亂する者、是れみな損友なり、親しむべからず。

（日新館童子訓）

自暴自棄いふは、いかやうのいましめを聞ても用ゐることなく人の善き事を見ても、學ばんとも思はず、只わがまゝにして、我が惡き事を改むべしといふ志もなく、善き事は我等の如きのゝ曾て與らぬことなりと、かたづけおきて、われと我が身をすて物にして、惡き事をとほして少しも善き事にすゝむ心なきなり、此の如き自暴自棄なる人は、人面獸心とて、顏は人の顏のなれども心は獸の心なり。志を起して惡き事を改むるならば、などか善き人にならざらんや。

（伊藤貞丈）

青年血氣のものは、動ともすると、粗暴を以て活潑となして、あたりかまはぬ振舞を以て、男らしと思ふことがないでもないが、それは甚しき心得違ひである。粗暴なるものは、大抵腕力を恃み人と爭ふことを好み、前後を考へぬのが常である。活潑なる人は腕力の强きを誇ることなく、人と爭ふことを好まず、又た考へずして行ふことはないのである。粗暴は我儘であるか、或は誤れる名譽心から生ずるものであつて、活潑は正しき心の上に立つものである。粗暴なる人は規律制裁に背きて得意がるけれども、活潑なる人は規律を守り、制裁を重んずるのである。

みな人ごとに、ものゝならざるうちは、人のいさめをもよくいれ道を守るの心あり。その望をかなへ得て、心のまゝなる時は、皆おごりになりて、貴きをいやしめ、いやしきをあなどる、この故にぞ、もろ〳〵佛神は望をかなへかね給ふなり。其の望もかなへて、あしからしめんより、かなへずしてよからしめんは、誠に大慈大悲なるべし。

世の中は千種の花の色々も
心の根よりなるとこそ聞け

常識とは普通の人情に通し、普通の事物を解し、能く適宜の處置を爲し得る能力をいふのである。されば常識ある人は、世の中に處して不義の譏を受けず、人と交つて不德の行ひなく、事を執つて宜しきに適ひ、能く人道の常道を歩んで、眞の成功に達することが出來得らるゝのである。さて常識はこれを修めんとの志が堅く、これを養ふに怠ることがなければ、何人でも得らるゝものである。『學ヲ修メ、業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ、德器ヲ成就セヨ』と詔らせたまへるも、亦た常識の修養を奬めさせ給へるに外ならぬのである。何人も常識の修養を努むべきである。

人と生れては、高きも賤しきも、せねばならぬものは學問なり。學問せねば、吾が身に生れつきたる、善あることも得知らずして他の人の德あるもなきも辨へず。又た昔を盛なりとも、今は衰へたりとも知らず、徒らに五穀を食ひて、前むきてあゆむばかりのわざにて、犬猫といはんも同じことなり。（眞木和泉）

何事もやしなひて見よ秋の田の
稻葉ももとは植し早苗を

人格は人の人たる所以であつて、實に人生の至つて貴きものである。我れは平常に自重して、己れが人格を維持せんと努めると同時に、又た他人の人格をも尊重することを忘れてはならぬ。妄りに人の感情を害したり、人の信仰を嘲けつたり、人の意見を侮りたり、人の名譽を傷くるが如きは、人の身體財産に危害を加ふると同じく、その人格を尊重する所以にあらざることを記憶せねばならぬのである。

雲よりも高き所に出てゝ見よ
何とて月に隠てやはする

一、人心の一致一和は、政治の要目なり。
一、民富めば國富むの言は、主たる人の一日も忘るべからざる格言なり。
一、人君たる人は、愛憎なきを要す。
一、人は一能一藝なきものなし、其の長所を採擇するは、人君の任なり。
一、既往の事を鑑みて、前途を計畫せよ。
一、勇斷なき人は、事を爲すこと能はず。
一、國政の成就は、衣食に窮する人なきあり。（島津齊彬）

仁に過ぐれば弱くなる。　義に過ぐれば固くなる。
禮に過ぐれば諂となる。　智に過ぐれば嘘をつく。
信に過ぐれば損をする。

氣長く心穩かにして、萬に儉約を用ひて金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり。この世に客に來たと思へば何の苦もなし、朝夕の食事うまからずとも、ほめて食ふべし。元來客の身なれば、好嫌は申されまじ、今日の行おくり、子孫兄弟に能く挨拶をして、しやばの御暇申すがよし。（伊達政宗）

この世に客に來りたるなれば義理あるべし、心に適ひたる食事に向ひては、善き御馳走に逢ふと思ひ、心に適はぬとても、客なれば譽めて食はねばならず、夏の暑さにも、客なればたしなまなねばならず、冬の寒さにも、客なれば堪えねばならず、腹立つことも、客なれば堪忍せねばならず、ちいさき家なれども、客なればふじやうして居らねばならず、衣服きたなしとも、客なれば堪忍せねばならず、親子兄弟召つかふ小者に至るまでも、客なれば挨拶よく暮し、跡に心を殘さず御暇申すがよし。

父母によばれてかりに客に來て
こゝろ殘さず歸るふるさと　（水戸光圀）

善を積める家には必ず餘慶ありと、古人も言はれしことあり、然ればとて善を積むこと、さのみ六づかしきことにもあらず、只だ不善をば爲すまじと、深く心を用ふるときは、善は自づから積めるものなり。偖て其の善を積みたりとも、己れは善根をつみしとて、鼻の先へ出すやうでは、これ名聞の善なるゆゑ、實の善根とはいふべからず、古語にも陰德あれば陽報ありといへり。たゞ人の爲め世の爲めに、信實心から善をなすを、實の善人とはいふべきか。

疑ふな、善を積みたる家にこそ、子孫に餘る慶はあれ。

陰德の報ひを知らばまのあたり、蒔きたる種の生へるのを見よ

勝つことを好んで、負くることを嫌ふのは、人の常情なのである人の解き得ざる難問を解かんと努力するも、競技に勝を占めんとするも、その他萬般の事について、他に優らんとするのは、畢竟競爭の心があるからである。斯かる競爭の念は、人を動かして發奮興起するところあらしめ、其の結果は自他の發展を促がし、延いて社會一般の進歩となる。競爭は進歩の母であるといへるも尤もである。何人もこの競爭心がなくてはならぬ。然しながら堂々たる公明正大の競爭でなければならぬのである。

すべて人間社會には、禮儀といふものがあつて、禽獸とは高尚にして、優秀なるを示して居るものでありますが、其の禮儀中にも恭敬といふ德は、身を率ゐ人に接する上に於て、必要缺くべからざるものであります。論語に『君子は敬して失なく、人に恭にして禮あり、四海の內皆兄弟なり』と記してある如く、恭敬の二字を以て、修身處世の要道としたものであります。

（處世講話）

人たるものは自主自營の計を立つべくである、人に倚り人の哀みを乞ふやうな行爲があつてはならぬ。勤儉は實に獨立の地盤である。勤儉ならぬものは、その地盤を缺くからして、遂に卑屈にならざるを得ないのである。されば苟くも有益なる事業を營み、自他の幸福を進めんとするものは、須らく青年時代から、勤儉の美風を養ひて、他日の用途に備ふところがなくてはならぬのである。

吉野川その源を尋ねれば
まことの櫻花の下蔭

道を説く人はあれども、これを知る人は鮮し、これを知る人はこれあり、これを行ふ人は鮮し、説くことを得ずとも、これを知るは説くに勝れり、これを知ることを得ざれども、まづこれを行ふは、これを知るに勝れり、説くはこれを知らんがため、知るはこれを行ふがためなれば、これを説きて知らざらんは説かざるが如し、これを知りて行はざるは知らざるがごとし。（澤庵禪師）

明治天皇御製

雨だれにくぼみし軒の石見ても
かたきわざとて思ひ捨てめや

上品なる言葉を使ふものは、その人柄を奥ゆかしく感ぜられ、下品なる言葉を使ふものは、その心まで劣つて見えるものである。古人も云はれた通り、言葉は心の聲なれば、心が正しければ聲平らかに、心が邪しまなれば聲も亦た亂るゝもので、我が言葉遣ひは卑しけれども、我が心根は氣高しといふても、誰れがこれを信ずるものがあらうか、決して信ずるものはないのである。何人も慎むべきは、言葉遣ひの上品なことである。

一、人を欺く爲めに學問すべからざる事。
一、人と爭ふ爲めに學問すべからざる事。
一、人の邪魔する爲めに學問すべからざる事。
一、人をそしる爲めに學問すべからざる事。
一、名を賣る爲めに學問すべからざる事。
一、利を貪る爲めに學問すべからざる事。

（足代弘訓）

己れに善き行ひありとて、人から褒められんことを待ちまうくるは、陋しくあるが、人に善き行ひあらば、我れはこれを褒めるがよい、人を褒めることを好まぬものは、善に進むことは出來ぬのである。それから人を褒めるのには、眞の同情からでなくてはならぬ、苟且にも卑劣の心からしてはならぬのである。人の非難は我れをして、善に進ましむる好意の鞭であるが、我れは決して人を誹つてはならぬ。人を誹らんよりは、先づ我が身を省みるべきである。

ワシントンは、自己を忘れて人類の爲めに盡す時は、男者たりしが、人から功を頌せらるゝが如き場合には、常に恐懼赤面して殆んど席に堪へざる有樣であつた、曾て國民議會が、彼に向つて感謝の決議をなし、議長が熱心に頌德の演說をなした時、ワシントンは答辭を述べんとて起立したが、口籠りて一言も發することが出來ぬ、議長が聲を掛けて、『ワシントン氏最早や着席なさい、閣下の謙讓は其の勇氣の絕倫なるが如く、閣下の無言なるは、我等の千言萬言に勝さる』と云つたので、彼は一語を發せずに終つたが滿場の議員もこの警言の雄辯に大に滿足したといふ。

昨日の非は恨悔すべからず、明日是れ慮すべし。飲と食とは度を過ごすべからず。生物に非らずんば苟も食はず。無事の時は藥を服すべからず。壯實なるを賴みて房を過ごすべからず。動作を勤めて、安を好むべからず。

（杉田玄伯）

かひなしやけふはきのふの過を
思ひしりてもあらためぬ身は
さし出る鉾先たれよものこゝに
おのが心を鐵鞭にして

内に思ひ遣りの心があつたならば、外に現はれて親切なる行爲となる。僅かのことにでも、情の籠れるときは、受くるものゝ身に取つては、その喜びは大なるものである。雨に逢へる人に傘を貸しやり、渇したるものに水を與へるやらなどは、誠に些細なることであるけれども、盡されたる人に取つては、云ふに云はれぬ嬉しみを感ずるであらう。人たるものは、事の大小よりもその心根に感ずるのである。人々互に思ひ遣り、互に親切を盡しなば、世の中は常に靄然たり、平和の空氣に充たさるではあるまいか。

妻は夫をあがめうやまひ大切にして、食物衣服などの內證の世話をやき、夫に對してりんき、ねたみの心なく、夫一人の外には、他人といたづら事をせず、夫のしかたいかほどわるくとも、それをうらみず、心がはりせず、死ぬとも夫の家を出ずして、一すぢに夫を思ふを貞女といふなり。是れ妻の法なり。

葦の屋のこやしの中の忍ぶにも
いなくまろは人の妻なり

すべて物事は確かなる、土臺の上に立たねば、成立が確かにならぬ、如何に美くしい樓閣でも、砂原の上に立てられたのでは役には立たぬ、必ず堅固なる礎の上に建てられなければ、その宏壯美麗を永く保つことが出來ぬのである。それ故に先づその土臺を堅固にせねばならぬのである。そこで人たるものは、何事にも必ず確かなる土臺として、立志と勵精とを要し、次ぎに立志、勵精堅忍の土臺として、身體の健康といふことが、必要となつて來ることが判かる。身體は實に萬事の基礎である。されば人々は常に健康を保つことに、十二分の注意を拂はなければならぬ。

あら物ぐさの翁や、日ごろは人のとひ來るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかねど、あまたゝび、心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや、物をも言はず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる、庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて、筆をそめ筆をすつ、あら物くるほしの翁や。

酒のめばいとゞ寢らぬ夜の雲（松尾芭蕉）

山は高きが故に貴きものでない、樹木があるからして貴きのである。人も肥えたるが故に貴きのでない、智識があるからして貴きのである。人は學ばなければ智識はないので、知識がなければ愚かなる人である。抑も人は生れながらにして、初めから貴きものではないのである、學んでしかる後ちに、初めて貴き人となることが出來るのであるから、人は努めて人格を作るべき、修養の功を積まねばならぬ。釋迦牟尼であれ、孔夫子であれ、基督であれ古來萬國の歷史上に名の遺れるほどの豪傑偉人は、みな修養によつて、貴き人格を得られたのである。

學者の病は惰より大なるなし、惰心一たび萌せば萬事瓦裂す、夫れ心は猶ほ水の如きなり、苟も之が堤防をなさずんば、必ず潰溢の患あり、學は猶ほ山に登る如きなり、少しく行に怠れば、則ち日に汚下に就く、人一毫佚惰の念を生ずれば、其心蔫け學退くは占せずして知るべきなり。或る人劉安世に問ふて曰く、侍制閒居何を以て日を遣るやと、色を正うし對へて曰く、君子德を進め業を修む、維れ日も足らず、而して遣るべけんや、是れ老て致仕せるもの尙ほ此の如し、矧んや遊學期にあるものをや、夫子博奕を以て放念終日心を用ゐる所なきに賢れりと。

（古賀侗菴）

大言壯語は心なき人の快とするところである。大なる目的を立てこれに到り達せんと努むることは、無論可なることではあるが、己れの力が果して成し遂げらるゝや否や、明かならざるに、いたずらに大言壯語することは、恥づべきことである。大言壯語は言語の上の虛飾であつて、かの身分不相應の美服を纏ひ、ひたすら外貌を飾るものとよく似たるものである。實際自己に成し遂げ得るだけの力があつても、他に向つて大言壯語することは慎むべきことである。

毎夜蓐に入らば、先づ當日行ひたる所業の著しきものを反省せよ曰く今日余は何處へ行きしや。曰く如何なる爲さざるべからざることを當然に爲せしや。曰く如何なる善事を爲すべきを怠りしや曰く人に對して不信ならざりしやと。而うしてこれを數へ畢りたる後ち、惡しき事はこれを除くに勉むべく、善事なりと思量せるものは、喜んでこれを累ねよ。

（ピザゴラス）

白浪もよせくる方にかへるなり
ひとな雜波のあしと思ふな

人が若し口に旨しとするが儘に、一時に多量の食物を貪つたり、或はその嗜むが儘に不消化な物を食べたり、或は屢ば間食をしたならば、その結果はどうであるか、必ず胃腸を害ふに至るのである、酒を飲めば頭痛を起すであらうし、身體を不潔にするときは疾病を誘ふであらうし、十分に睡眠せぬときは、翌日に至つて疲勞を感ずるであらう。これみな自然的の制裁といふものである。

身の科を己が心に知られては
罪の報ひを如何てのがれん

ジエームス、オー、ヂユボンは、世界屈指の博物家であるが、特に鳥類の研究に心を用ひ、米國の森林に入つて有ゆる鳥を寫生し數年の勞苦を積み、標本を完成して、これを友人に托して保管せしめて置たが、保管者の不注意によつて、鼠の爲めに一切食ひ破られて仕舞うた。ヂユボンは再び山林に入つて、三年の日子を費やして、有名なる大著述の材料を整へたのである。

心には怒りよろこびあるとても
深くたしなみ色にいだすな

梅は梅の愛すべき香色あり、櫻は櫻の愛すべき香色あり、桃李海棠の類に至り、各其のよき所あれば、其の本色の儘を佳とす。若し梅に櫻の花の開き、櫻に梅の花開きたらんには妖と云ふべし。人も亦た斯の如し。武士は武士、儒者は儒者、醫者は醫者と、其の本職を守り、心力を盡して外に遷るべからず、其の業を勤むる者は、六十にても、七十にても志懈たるべからず、半途にして懈たれば前功を失ひ、未熟に復るなり。譬へば急流に船を泝するが如し、手を放ち櫓を停むれば、忽ち下流に回るなり。

（安積艮齋）

知らざることは、知らずとして人に問ひ、能はざることは能はずとして、外面を粧ふてはならぬ。己れの爲さゞることは爲さずとせよ、他人の功を奪ひて、己れ一人もてはやされんことを望むのは、陋劣の極みである。自ら爲したることは、爲したりとせよ、惡しき事なりとて、既に爲したることは、包み隱して責を免がれとするはよろしからぬことである。人は正直といふことを守らねばならぬのである。

若竹や人にもほしき育ちぶり

習慣は第二の天性である。故にこれを改むることは困難である。されど全く出來ぬことではない。一度作り上げたる朝起きの習慣も、些細の怠慢から忽ち破るゝことがある、これに反して惡しき習慣は、知らず識らずの間に增長することが極めて容易である。惡しき習慣に打ち克つは、やがて善き習慣の地盤を作るので。諸の善き習慣は、克己といふ根や幹から榮え出でたる枝葉に外ならぬのである。善き習慣を養はんが爲めには、父母師長の教訓を服膺するのが、最も近道である。然し一時に多くの習慣を養はんとするなれば、却つて一つの習慣を養ひ得ぬことになる。

淡泊なるものは、心に思ふところと、言語動作に表はすところと相一致するからして、表裏もなく蔭日向もないのである。信長の訃音に接して、少しもさわがず、その事情を明らさまに敵に語りし、豐臣秀吉の僞りなき態度が、敵將小早川隆景をして、感歎措く能はざらしめたるが如きは、その實例の一つとある。山鹿素行がその士道論に於て、『水晶の瓶に秋水を湛へ、白玉の盆に氷を載せたらんが如く、隱れたる所なき風情を、大丈夫の態度とす』と述べて居られる。淡泊は古來我が國民の尙べきところで、武士道の一要素とも云ふべきである。

凡そ信實の必要なることは、最も單一なる交際の上にありて、これを見ることを得べし。人の言語は交際より生じて、交際の爲めに必要のものなり、彼我思想を交換せざるときは、相互に其の意を領會すること能はざるなり、思想を交換せんとするには、言語は缺くべからざるの器械なり、言語若し信實ならざるときは、唯だ意味なき標識を述ぶるは過ぎざるものなれば、言語の必要なりといふことは、即ち信實の必要なりといふことなり、若し相互の意思相通達し、信實といふもの、社會の發達に必要となりたる時至り、始めて信實の德を見ることを得べし。（ステハンス）

人若し私慾に迷ひて、不正不義を行ひなば、生きては縲紲の辱めを受け、死しては汚れたる名を、後の世にまで遺すことは免かれぬ。不正の行ひには必ず惡しき報ひがある。たとひその事が直ぐに人の知るところとならずとも、何時あらはるゝかも知れぬから己れの心はしばらくも安き時なく、常に恐怖の情に充たさるゝのである。私慾のまよひは眞に恐るべきものである。

明治天皇御製

思ふこと繕ふことをまだ知らぬ
なさな心の美しきかな

フランクリン曰く『汝生命を愛するか、さらば汝の時間を徒費することなかれ、汝の生命は汝の時間より成ればなり』と。五分間を空費するものは、それに相當する自己の生命を失ふものである五分間に成し得べきことは、小なれども、度重なれば大となるのである。佛國の大法官ダゲッソーが、希臘語の聖書を佛語に飜譯したのは、食卓に就き料理の來るを待つ、零碎の時間を利用し、二宮尊德が幼時採薪の途上、大學を誦讀せしが如き、エリフ・バーリットが鍛冶匠として勞働する間に、十八ヶ國の語に通ぜしが如きみな僅少の時間を惜みて、有益なる効果を收めたものである。

あら面白の春雨やな、　花をちらさぬほどに降れ。
あら面白の酒盛やな、　禮を忘れぬほどにのめ。
あら面白の茶の湯やな、　武事を忘れぬほどにせよ。

（林　梅　林）

一筋に道をば盡せつくばば山
　このもかのもに心移さて
風はふけど雪はつもれど色かへぬ
　松の操は人ならはなむ

善良なる品性を修養するのも、不善なる品性を打破るのも、その始めを慎むことが、最も肝要であると思はれる。品性を修養して行く必要を自覺したならば、永遠に修養して行かねばならぬ。一時的の修養では左程の効はない。尤も一時的でも、修養するのは修養しないよりも、優つて居ることは無論である。けれども、これは一生を貫いて成し遂げねばならぬ。品性の修養は、人格の如何に直接の關係あることで、品性を修養せずして、單に人格のみを高尚ならしむることは、到底望むことは出來ぬ。人格の高尚であると否とは、品性修養の力を須たねばならぬのである。

人は兎角慣れると疎末になる癖のあるもので、俗に咽元過ぐれば熱さを忘れて、日照の時に水の一滴は、如何にも難有く感ずるけれども、平常の水の一滴にそれ丈の敬意を持つ人は無い、我々が生きて此世に働いて居るからには、すべての物に向つて感謝の念を持つて居ないと大間違の基となる。宗教の奥儀もこゝにあるに違ひない、働きたいと思ふても、仕事が無うて困つて居る人が、世界には何百萬人あるか知れぬ、日々我々に仕事を授けてくれた此事に對しては、十分に敬意を持つて居なければならぬ。

（森村市左衛門）

すべて何事をなすにも、缺くべからざるものは、奮勵努力なのである。これが無ければ、如何なる一小事業とても成ることはないのである。苟も生きてこの世中にあるからには、みな幾分かの奮勵努力をして居るのであるが、その程度にはおのづから差異がある。さうして有效なる奮勵努力は、唯だ氣のみを以て得べきものではない、必ずや相當の素質がなくてはならぬ。彼の無教育なる山間の農民が、今日に數倍の努力をなすとも、その效果は知れて居る。國家の望むところは、教育あるものゝ奮勵努力である。

公平とは自分の愛憎により損得によりて、偏頗なる取り計を他人に加へぬ心得であります。即ち及ぶ限り正當に物事を取計ふて、他の人に迷惑をかけぬやう、又自分をそれが爲めに汚してはならぬのであります。然し人は兎角感情に流れ易いものでありますから、隨分正當に事を取扱はんと思ふても、ツイ思はずも好き嫌ひによつて、偏頗な行ひをし易いものであります。況して幾分なりとも、心に快く思ふて居らぬ人とか、何とはなしに氣に入らぬと思ふ人に對しては、兎角偏頗になり易いものであります。これは深く戒めねばことであります。

（足立栗園）

多くの人々が相集り、互に相補ひ相助けて樂しく生活することの出來るのは、各々規律に從つて振舞ひ、社會に秩序があるからである。強いものは弱いものをいたはり、年若きものは長者を敬ひ道を行くには左側を通り、徒歩のものは車道に入らず、人の仕事を妨げず、案内を乞はずしては、他人の家に入らず、斯る秩序あればこそ、人は皆な幸福なることを得るので、若し一たび社會の秩序が紊れなば人々の幸福は忽ち失はるゝのである。我等が法律規則に從ふは、單にこれに服從するにあらで、實に我等に屬する社會の秩序を正し共同生活の幸福を得んが爲めなのである。

吾人の生涯が日となく夜となく、波に搖れて風に吹かれて、行方も知れぬ大海に漂うて居る、捨小舟のやうなものであるとすれば人生は如何に頼みなく、如何に味氣ないものであらう、吾人は想像するだに、殆んど之に堪へないのである。陸を歩んで目指す土地のある如く、海を航して目指す港灣のあるが如く、前途に目的があつてこそ、吾人一切の行動は茲に意義を生じ、茲に努力を生ずるのである。生れ甲斐ある生活とは、先づ目的ある生活である人格の一大特色は、目的を立てゝ一切の行動を之に統一し、以て其の實現に努力するのである。

（嘉納治五郎）

人の價値は高尚なる活動の多いのと、寡いのによつて定まるのである。たとひその精神的活動が大ならずとも、方向の正しき肉體的活動の分量が、大なるならばその價値も亦た多いのである。苟も正當なる活動であるからには、如何なる職業に從事しても可い職業には貴きと賤しとの別はないので、唯た活動の程度方向によつて、善惡優劣の差を生ずるばかりである。されば我等は正善なる目的に向つて、出來得る限りの活動を續けて、價値ある人物とならんことを期すべきである。

一、物を玩べば心を失ふ。　己れがすき好む事の一途に流れざるやうに心懸くべし。

一、金穀の經濟は人々能く了知すべし。　大小の祿に應じて家道を約にし、他の力を願はずして、朝暮を節し、蓄積を心掛くべし。

一、飲食男女は人の大慾存す。　愼まざるべからざるなり。酒食と婦女には大丈夫も度を失ひて身を損じ、或は義理を缺き、恥辱を取り、不和を生じなどして、終に國家を破るもあり、人々能く謹み愼むべし。

（林　子　平）

人は高慢になるとおしまいである、おれは餘程エライと云ふ氣持になつたら間違ひの基で、もはや智惠も力も殖えることが出來ぬのみならず、折角持つて居る學問上や、經驗上の力が却つて身の害になるものである。『謙遜の人は幸ひなり。天國はその人のものである』と、バイブルに說いてある。稻の穗にまだ實が入らぬ內は、ツンと突立つて居るけれども、實が入るに從つて、頭がさがる。分別の備はつた人は、エライ樣な風をせぬ。ヒイラギの木の葉には、ツン〳〵角があるけれども、年功を積むに從つて次第にまるくなる。

（森村市左衛門）

世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當てたるをいふ。眞の機會は理を盡して行ひ、勢を審かにして動くと云ふにあり、平日天下國家を憂ふる誠心厚からずして、只だ時のはづみに乘じて成し得たる事業は、決して永續せぬものぞ。

（西鄕南洲）

よきに似よあしきにになすべて世の人の心は自在かぎなり

一、事物を精細に且つ正確に觀察すべし。
二、綿密周到なる注意を以て事物に接すべし。
三、物の表裏を考へ、又た事の原因と結果を究むべし。
四、審思熟慮する習慣を養ふべし。
五、何事にても其の大體を看取して要領を得ることに努むべし
六、人情を重んじ、世態を顧みるべし。

よく斯の如くならば、庶幾くば判斷を下して正鵠を得、云爲して中正を得、謂ゆる常識を養ふことを得ん。

人から憎みを受けるのは、自分の身に何か缺點があるからである それと同じく、自らが人を憎むのも、その人の言葉遣ひや、素振りが氣に入らぬからである。然し憎むとか、憎まるゝとかいふことは、感情の行き違ひから起る場合が多いのである。されば人は平素自分の行動や言葉遣ひを愼み、憎まるゝことを避くると同時に、人を憎まぬやうにすべきである。

憎むとも憎み返すな何時までも
憎み憎まれ果しなければ

わが身を修むるには、譽められんとすべからず、たゞ過なからんことを思べし、我身だに道理にかなはゞ、人の毀り譽れは、さもあらばあれ、喜び憂ひとするにたらず。但し士の節義武勇の道と、又た利慾のけがれなく、廉潔にして貪らざる、この二つは、なべて人の毀らざるやうに、心がけつとむべし。名を惜むも、義において害なし。この二つの事かけなば、その餘は見るに足らず

（貝原益軒）

盲ふ人の躰はし見るな兎も角も
能きこゝ取りてわが德とせよ

古の道を聞てもなべても
我おこなひにせすば甲斐なし
理と理とたゝぬ世ぞとて引き安き
心のこまのゆくにまかすな
善き惡しき人の上にて身を磨け
友は鏡となるものぞかし
敵となる人こそは吾師匠ぞと
思ひかへして身を嗜め

（島津日新齋）

有名なるゴルドン將軍は、戰陣に立つときは、如何なる大軍をも取り挫ぐの勇猛豪氣の人であるが、病める人の傍に行きて、葡萄の房を取つてこれを口に含ましむるときには、全く愛の人であつた。將軍の偉大なる戰陣にあつてよりも、愛の人たるにありといふてもよろしいのである。

卑しさて隣つる心あるならば
賤が伏屋に月はやどらじ

儉約を心がくれば、おのづから吝嗇の方に流れ易きものにて、必ずすべき事をも止めてせず、人に取らすべきものをも惜みて取らせず、甚しき者は人の物をさへ、奪はまほしく思ふやうの心にもなり易し、然るに此處をよく心得て、儉素にしてしかも吝嗇に流れぬやうには、ありにくきものなり。殊に上にたつ人など此わきまへなくして、吝嗇なる時は、下の潤ひ乾きて甚だ宜しからずされば儉約も實には宜しき事にあらず、兎角上中下各身分相應にくらすがよきなり。

（本居宣長）